

290
9
479

崎弘道著

信仰之理由
全

東京 警言社發兌

信仰之理由序

本書は著者が曾て基督教新聞及

雑誌に掲げたる論文に基き之を添削

し分ち順を立て足らざる所

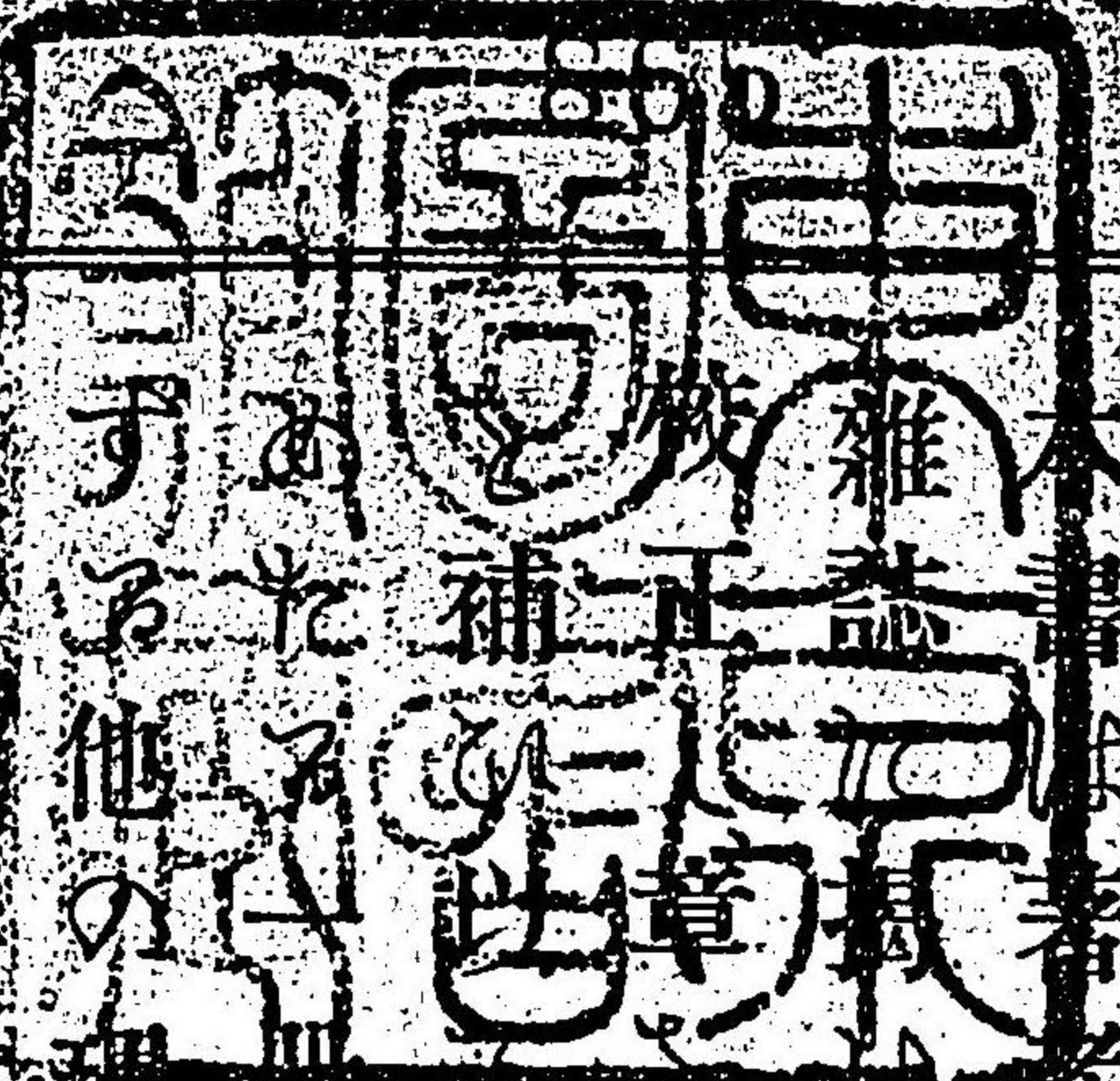
を其趣旨と全篇に貫徹せし

めたる所の書なりとす。本書を出版

する他の理由あるに非ず唯著者實際

傳道の事に従ふに新たなる人に會ふ

毎に幾回となく同じき證據論を繰り



返さざる可らざる事なるが故に平生
 用ゆる所の證據論の要點を記し、以て
 演説に代ふるの趣意に外ならむ。蓋し
 目下世に行はるゝ有神論及證據論の
 書類少からず、然れども多くは翻譯書
 の類にして、現今我國の必要に適當す
 るもの甚だ少く、之を讀む者實に靴を
 隔て痒を搔くの歎なきを得む。本書別
 に著者一己の創見あるに非ず、然れど

も本書は決して他の二三の書に倣ふ
 乎、若しくは其論旨を其儘取用し來り
 たるに非ざるなり。要するに本書に用ゆ
 る所の論法は、多くは著者が數年來論
 談上實際に應用し來れるもの乎、若し
 くは著者一己の信仰を固むるに用ゐ
 たるものにして、其内他書より得たる
 もの少からざれども、一として著者の
 頭腦を經過するに於て、多少の變更と

見ざるものなし。
 本書は傳道及び新聞雜誌編輯の餘暇に成りたるものにて、文辭甚だ拙陋論法欠漏少からざるを知る。若し夫れ本書にして道と求むるものを導くに於て、少しの補益をも爲すよあらば、著者の望や達せりと云ふべし。

明治二十二年二月下旬

著者識

信仰之理由

目次

第一章 宗教總論……………一
 第二章 神の思想及其原因……………二七
 第三章 神の存在……………四二
 第四章 人類と神の存在……………六二
 第五章 天啓及其必要……………七六
 第六章 基督の神性……………一〇五
 第七章 奇跡及其効用……………一三七
 以上

信 仰 之 理 由

小 崎 弘 道 著

第 一 章 宗 教 總 論

上帝果して存在する乎吾人は必ず之に奉事せざる可らず。
 靈魂果して不朽ある乎吾人は必ず永生を得るの手段を求
 めざる可らず。上帝果して神子キリストを此世に降したる
 乎吾人は必ず其恩寵に浴して救を求めざる可らず。凡そ吾
 人の此世に在る宗教上の問題より至重至要なるはあらざ
 るなり。我が邦人は久しく假教の迷夢に彷徨し慣習性とな
 り、真理の重寶可きを知らず徒に之を玩弄す。豈に浩嘆に堪

ゆ可けんや。昔日キリストの時に當り、希臘の學問已に衰へ、羅馬の宗教復人心を維持するの力なく、學者大概信を無窮の眞理に置くことなく、唯詭辨口才のみを事とせしが、當時の上流社會に位地を占めたりし彼のピラトは、キリストが「我は王あり。我これが爲に生れ、これが爲に世に降れり。蓋眞理にいつて證を爲んため也。すべて眞理に屬く者は我聲を聽」と宣ひけるを聞き、直に問を發して曰けるは、眞理は如何なる者ぞと而して其答をも待ずして其場を立ち去たり。蓋しピラトの意たる、古來より種々の學者ありて千差萬端の説を立てたれども、其説たる互ひに相矛盾し、片時も一定の説ありたるを見ず、殊に神人間の立理に至りては、争て眞理を見らんとを得ん、然るに此人は妄りに眞理に就て證を爲す

と云ふ、何等の謔語予、亦何ぞ其答を待つに及ばんと爲せしに外あらざらん。今日我國學者の思想略之に類する所あり。宗教の問題を以て唯利害得失にのみ關することと爲し、之を以て全く眞正邪の問題の外に置くことを爲す。斯の如きの懷疑は思想變遷の時代には免かる可らざるものと見へ、古今其揆を同ふする亦奇と謂はざる可らず。夫れ今日宗教を説くの難きは、其證據の不充分あるに非ず、其論法に正確を欠くが故に非ず、唯人をして斯の如き疑問に着目せしむるの困難あるのみ。我邦人は宗教眞否の問題と云ば、恰もピラトの如く直に眞理は如何ある者ぞと輕蔑し去りて、復た省ることを爲さざるなり。嗚呼吾人の如何にして斯る人心を改良するを得、如何にして此謹嚴ある問題に世人をし

て着目せしむるを得か思ふて此に到れば轉た慷慨の念に堪ざるなり。

キリストは眞理について證を爲したり吾人キリストによりて宗教上の眞理を明にするを得吾人は何より來り何へ行ものある乎吾人の目的本分如何ん天地萬有の偶然に發生したるもの乎將た之を主宰するものありて然る乎上帝の存在其性質は如何此皆キリストの證明を俟て始めて明かなるを得是れキリスト信徒の共に信ずる所なるが果して然るべき理由ありて存するや否や吾人は徐ろに其證據理由を求めざる可らず吾人は決してピラトの如く之を輕蔑し去る可らず唯夫れ吾人は一意一心名奔利走汝々汲々として世波紛擾の間を驅馳せんとして他に餘事なきもの

あり故に高遠幽邃の奧理を聞くも馬耳東風の感あるを免れず罪惡の念我が明鏡を掩ひ目前の私欲我が心中の光を塞ぎ人の人たる本分を盡すとを省みず恰も禽獸の如き生活爲す者なり吾人は眠るが如く死するが如く芒々乎として無神經に此世を渡るものあり故に常に赫々たる宗教上の眞理を見るも之か爲めに何等の感覺を起さざるものなり然れども一旦何かの事情に由て其眠を醒し幽冥世界の眞理を見ることあるや從前の無感覺は變じて活潑なる感覺とあり忽ち無限の感動を惹き起し十分宗教世界の眞理を悟る迄では安心を得ざるに至らんとす是れ古へより聖賢の士が眞理を討尋して寢食を忘れ之を得んが爲め富貴榮達をも棄てたる所以あり彼の釋迦が深宮を脱し數

年ねんの間あひだ雪山せつざんに閉とぢ籠こもり解げ脱だつの道みちを求もとめたるも此こ感かん覺かくに外ほかならざるなり。
 嗚呼あゝ宗しゆ教けうの眞しん理りたる之これを仰おほげば彌いよ高たかく之これを眺ながめば彌いよ廣ひろく、
 茫ぼう々々乎ことして其その津涯しんがひを知しざるなり誰たれか之これを知しずして其その心こころ
 に平へい安あんを獲うるを得ん。

世人せいじん動うごもすれば云いふ宗しゆ教けうは信しんに在ありて知ち識しきにあらざると宗しゆ
 教けうを以もつて論ろん證しやうす可べからずと爲なすもの甚はなだ多おほし是これ一いちを知しり
 て未いだ二にを知らざるの論ろんあり勿も論ろん宗しゆ教けうに於おいて信しんの必要ひつ要ようあ
 るは恰あたか物ものを知しるに五ご官くわんの必要ひつ要ようあるが如ごとく申まうす迄までもな
 きとなれども信しんにして信しんずべき理り由りゆ論ろん證しやうに基もとかざるとき
 は是こ唯ただ迷めい信しん忘わう想しやうのみ何なんぞ之これを以もつて信しんと爲なすを得ん見みずや
 彼かのキキリリスストトの弟で子したるヨヨハハ子しは己おのが信しんずる道みち即すなはちキキリ

ストに就つき我われ儕ちが聞きまた目めに見み懇ねん切せつに觀み我わが手て捫さりし所ところ
 の者もの即すなはち元はじめ始めより在ありし生せい命めいの道みちを爾なんぢ曹そうに傳つたふと云いひ又また
 彼かのルルカカはテヨヨピピロロなる人ひとに書かき贈おくるに爾なんぢが教しよられし所ところ
 の確かく實じつを曉さとせん爲ため我わが原はらより詳しょう細さいに考かう究きゆうしたる諸しよての
 事ことを次し第だいを爲なして書かきおくると記き載さいし其その信しん仰やうに明めいく
 赫かく々々争あらそふ可べからざるの根こん據きよあるを示しめせしに非あらずや夫てんれ天てん人ひと
 に賦ふするに理り性せいを以もつてせり眞しん成せいの宗しゆ教けうにして豈あに道たう理りに
 基もとかざるものあらん豈あに其その理り由りゆ論ろん證しやうを見みざることをあらん眞しん
 正せいの宗しゆ教けいなる者は唯ひと人の感かん情じやうに訴うつたへ之これに安やす慰きを與あたふのみ
 を以もつて足たれりとす可べからず必かならず其その理り性せいにも亦また適てき當たうの満まん足ぞくを
 與あたへざる可べからず唯ただ人じん性せいの半はんに満まん足ぞくを與あたふあるも其その全ぜん賦た
 に適てき合がうする者ものにあらざれば未いだ以もつて眞しん理りの宗しゆ教けうと爲なす可

らず。情基督教の基く所を見るに、啻に人性の至情に訴へ之に無限の感動を與るのみならず、又人の最も深遠なる理性を満足せしむるとあり。希臘の哲學も、近世の獨英の哲學も、其最も深遠なるものは之と其揆を同ふせざるはあし然のみならず、之が他の假教に最も異なる所は決して動す可らざる最も確實ある歴史上の事實に基く事なり。余が初め基督教を聞や、唯其の奇跡休徴の不可思議あるに着眼し、思へらく斯の如き妄誕不經の教、如何にして彼の文明國に行はるゝを得る、將た西人形而下器械工藝の術に巧みたりと雖も、未だ形而上心理修身の道に明かならざる乎。嗚呼、彼が一に長じ一に短く、何ぞ長短相去の甚しき哉と驚嘆措く能はざりし。已にして之を信奉する人々と交り、其品行の方正なる、

其心事の潔白なるを觀、稍々其道德の慕ふべく、之が人心に大なる感動を與るの教なるを知りたりと雖も、未だ之に確實なる道理的の根據あるを知らざりし。後進んで此教の眞否如何んを究め、其論證を求むるに當りて、最初輕侮の念は、變じて尊崇の心とあり、其道理の深遠なる、其論證の正確なるを觀、實に讚嘆に堪へざりし。思ふに初めて基督教を聞も、の亦余輩と同様の感覺を抱くならん。余が斯の如き人に向て勸むる所は、暫時の忍耐あり、基督教は一見甚だ粗造の茅屋にして、之に入るに堪ゆ可らざるが如くなれども、姑く忍て其門戸に入るを爲さば、其屋裡は乃ち珠簾翠帳之を掩ひ、寶玉珍器之に陳列せるの靈宮なるを知らん。俎て吾人が宗教を學ぶに當りて、最も注意すべきは、其精神

如何是れなり。蘇國グラスゴ―大學の教頭博士ケ―ルド氏曰く、物質界天賦の現象を観察する者は、其鏡面に一點の瑕瑾あれば、之が爲め全く其觀察を過るとあるが故に、其器械を完全にせん爲め非常の注意を爲すが如く、高尚なる眞理の世界を攻究する者亦良心の鏡面が私欲偏僻の塵埃にて汚されざるやう大なる注意を爲ざる可らずと、實に眞なる哉吾人眞理を學ぶに、苟くも私欲の念、偏僻の情、其心に塞がりて障礙を爲ことあらば、争てか公平の觀察を爲すを得ん。殊に眞理の利害得失の關係の大なる又之が高遠精微あるに從つて、心情の如何に關する更に甚しとす。人性の如何んを知る者は誰か此の明白なる事實を看過することあらん。彼の道德を重ぜざりしホッブスさへ、此事實に觀察を下だ

して曰く、人は自己の利害に關するとあらば、習慣より道理に訴へ、又道理より習慣に訴へ、勝手次第の議論を爲すものなり。是れ善惡の論は常に筆と劔にて争はるゝことあるも、數理の如き人の利害に關せざる論に至りて之を論争するものなき所以なり云々是れ數學の理を争ふものは少かれども、宗教の眞理を疑ふもの多き所以ならん。果して然らば、吾人か宗教の理を知る能ざるは、吾人の罪惡與かりて力ありと知るべし。豈に深く反省せざるを得んや。されば宗教を學ぶに當り、先づ必要なるものは虚心なり。イエス山上の垂訓に曰く、心の貧き者は福なり、天國は即ち其人の有なれば也と自ら驕り自ら智ありとする者の、天國の門に入るを得ず。是れ先入主とあれりなり。人の自然に眞理

に就き難きや古へよりキリスト教の傳播に大なる障礙ありし勿論學問上一真理の發明ある毎に多少の迫害なきはあらずしを以て知るべき也コパルニカスガリ、オを始めとし今日に至る迄一真理を發見するものある毎に之が爲め多少の障害を受けざるはあし何故に然るや當時の人心に先入主とあるとあればあり又國に一改革ある毎に多少の戦亂あらざるはあし是れ人心新異を厭ふの例證にあらずして何ぞ一己人に於ける亦之に異なるなし吾人新しき宗教を學ぶに當り深く爰に省るにあらずんば知らず識らず真理を輕侮するに至らん何ぞ深く之を誡めざるを得ん。

高尙なる真理を學ぶに第二必要なるものは誠意之を求

むるの心なり求めよ然ば與へられ尋ねよ然ばあひ門を叩けよ然ば開かることを得んとは是れキリストの吾人に與へ給ふたる聖約なり真理は猶ほ黄金珍寶の如し之を求めざれば得可らず黄金珍寶遊惰怠慢の者に與せざるが如く真理亦偶然天より人に降り來る者に非ず故に聖書にも「饑渴義を慕ふものは福あり」と云ひ誠意以て道を求むべきとを勸奨せり學者往々人の真理を知り之を信ずるを以て恰も明鏡の物に映ずるが如く人の自由に爲し得べきとにあらず虚心さへあらば過ちあかるべきが如く思想すれども此れ唯一を知て未だ二を知らざるの説のみ真理を學に虚心の必要あるは勿論なれども又之を求るの心なかる可らず夫れ人心は生物なり自由の活動物なり之に真理を映

ずるの力ありと雖も、之を映せんと欲せざれば之を映ずる
 を得ず。心あらば秋毫の微を視るを得ると雖も、心なきとき
 は興薪の大をも見るを得ざるなり。心自ら偶然に動くに非
 ず、之を主る者ありて然るあり。求むれば如何なる微妙の眞
 理をも知り得べしと雖も、求めざれば明々赫々火を見るか
 如き眞理をも悟るを得ざるべし。是れ學はカントニウトン
 に駕し、文は韓退之シエーキスピールを壓倒するか如き學
 者と雖も、蠻人小兒も容易に解し得べき、明晰なる宗教道德
 上の眞理を悟り能はざるとある所以なり。殊に宗教道德の
 眞理の如き高尙奥妙なるものに至りては、五官の助を待つ
 となく、唯心を以て之を認得する者あれば己に切に之を求
 むるの心あるにあらざんば、到底之を識別す可らざるなり。

是れ宗教を學ぶに當り、誠意之を求むる心の甚だ必要なる
 所以なり。然れども眞理を學ぶに最も必要なるもの、高尙なる道德
 あり。孔子曰く君子喻於義、小人喻於利、其道德の如何んによ
 り其喻る所一ならず。我に義心ありて始めて義士の心實を
 喻るを得、我に愛心ありてこそ始めて仁人の衷情を詳にす
 るを得るなれ。苟くも我に義心、愛心なくんば、恰も盲人にし
 て色を評し、聾者にして音を談ずると一般、争てか義士、仁人
 の言行を公平に評するを得ん。宗教ある者は神の愛と義を
 以て立つなり。我に愛あり義ありてこそ始めて上帝存在基
 督降生の理を明にするを得るなれ。彼の獨國の學士ルタル
 Ⅰが神を信することは學術にあらざ、道德ありと云へるも、

亦此理に外ならず。故に聖書には亦心の清き者は福あり、其人は神を見ることを得べければなりと云へり。物質の世界に於ては賢不肖別に其智に異なる所あるを見ざれども、形而上殊に道德宗教の境域にありては然らず。一小紙片にても其眼を遮るることあらば、前に横はる大山をも見る能はざるが如く、一點の汚穢我が心を掩は、明々白々の眞理を隠すとあり。豈深く誠めざるを得んや。故に宗教を學ばんとする者は、先づ其心に自己の品格如何んを省み、其意を誠にし、其心を正ふし、而して後其眞理を悟るを得るあり。凡そ世の智識あるものにして、宗教を信じ能ざる所以は、多くは其道德心の不足なるに因る。何ぞ知らん彼のキリストが其説教の終に臨み、常に「耳ありて聽ゆる者は聽くべし」と宣へる

も此理に外ならざるを。然れば高尚なる眞理を探求めんとするものは、常に自己の道德如何んを省ざる可らず、而して其道德高尚にして始めて高尚なる事理に通ずるを得ることとを忘る可らざるなり。

以上宗教を學ぶの心得注意の主要なり。余は之より進で基督教とは如何あるもの乎を述べんとす。昔者韓退之老子の仁義を小なりとし之を非毀するを評するや曰く「坐井而觀天曰天小者、非天小也。彼以照々爲仁、子々爲義、其小之也。則宜と今日基督教を以つて信するに足らずと爲す者多くは此の類なり。彼が所謂道、道其所道、非吾所謂道也。其所謂德、德其所德、非吾所謂德也。夫の神と云ひ罪と云ひ救と云ふも、多くは自己の想像を以つて、兎やあらん角やあらんと定むるも

のにて、我が基督教にて神と云ひ罪と云ひ救と云ふものに
 非ず。是れ本論に於て始めに基督教の如何を説くのも必
 要なる所以なり。一言以て基督教の如何を説くは、吾人の最
 も難んずる所なれども、今試みに之を云はん。にキリスト
 は神人親和し、吾人の生命本分を全ふするの道なり。之を主
 観的より云へば、吾人罪惡を去り己を棄て、其生命はキリス
 トと偕に神の中に藏れあるもの、或は神の生命我に存する
 ものなり。然れど客観的より之を云へば、歴史上の事實にし
 て、人は元と神の肖像に造られ、神と親交し以て其性を全ふ
 すべきものありしに、始祖罪を犯して神に離れし以來、人皆
 な其本良を失ひ罪惡に沈み苦厄に陥り、遂に神の嚴罰を蒙
 るべきものとありしも、神は尙ほ之を棄て給はず、世の始め

より救濟の方を立て、アブラハムの子孫を撰で神の民と爲
 し、其苗裔より救主を降すの約を立、遂に千八百八十餘年前
 に於て、其約に違はず猶太國に救主キリストを降し、三十三
 年の間地上に居き、種々の異能を現はし、様々の教を爲さし
 め、一身を以て全人類の犠牲に供し、十字架に懸りて天下億
 兆の罪を贖ひ、三日にして復活し、四十餘日間地上に在り、後
 ち上天して約束の賜なる聖靈を其弟子に降し、行て万國の
 民に其道を傳へしめ給へり。其事跡悉く載せて舊新兩約の
 書に在り。是れ基督教の大意あり。今の基督教中上帝の存在、
 及び其性質、宇宙の成立及び其結局、并に人類の起原及び其
 命數等の問題を云へば、所謂哲學の問題にして、吾人は理性
 の上より之に觀察を下さざるを得ず。然れども舊新兩約書

中にて見ることを得る天啓の事實は、歴史上の問題に屬する
 ると爲さざる可らず。且つ其教の人心に感動影響する所天
 下万民に於けるも、一己人に於けるも、人にあるも我にある
 も、實驗の事にして、吾人は得て之を徴すべきなり。故に基督
 教は理論歴史及び實驗の三根に基くと謂て可あり。是れキ
 リスト教の他教に超越して確實ある論證ある所なりとす。
 他の教に至りては、或は實驗上の事跡あるも、理論歴史の根
 據なく、或は稍理論に過るとあるも、歴史の基礎なく、又實踐
 し難きの困難あるを免れず。獨りキリスト教に至ては然ら
 ず、理論あり又歴史に徴すべく、又實驗すべきあり。
 凡そ世界に行ゆる、宗教の、其數皆に千百のみに非れども、
 多くの國民教と稱する者にして、唯一國民二人種若ば一時

代にのみ限れるものとす。彼の古代の印度希臘羅馬の宗教
 の如き、又現今未開の邦國に行ゆる、偶像教の如き、我國の
 神道の如き、其の一か、即ち此類あり。而して此類の宗教は、
 已に識者の信用を失ひ、愚夫愚婦を除くの外、復た其眞偽を
 論ずるものなきに至れり。唯現今世界にて統一宗教と稱す
 るもの、回教、佛敎、及び基督敎の三あるのみ。然れども回
 教の妄誕不經にして、容易に妄想に富めるアラビヤ人の
 想像に成りたるを解説するを得べく、又佛敎の起原歴史を
 自然の理法によりて解説するを得るの難きに非ず。獨り基
 督敎に至りては、然らず。其起原たるや、聖人道を求め眞理を
 討究して之に達したりと云ふに非ず。上帝人の罪惡に沈淪
 するを憐み、之を救はん爲めに啓示したるの宗教なりと唱

へ、又其歴史は他の宗教の如く思想禮式等人類の歴史に非ずして、上帝人を救助するの歴史たりと云ふ。基督教は天下万民の教と稱するのみならず、人生終極の教ありと主唱す。されば今日世界の宗教論は此教が善ある乎、彼教が正き乎、なと比較の論に非ずして、基督教は果して眞實あるや否の一論に歸せりと云ふべし。基督教果して此要求を維持し得るや否、吾人は理論と事實と實驗の三によりて之を論證せざる可らず。

證據論に於て理論の必要なるは古より今日に至るまで之を排撃する者は多くは之に依るを見て知るべきなり。古へ彼のセルソス、ルシヤン、ヂュリヤン等が基督教を排撃したるを見るに、孰れも喋々之か不道理を唱へ、專ばら理論によ

りて之を駁論せざるはなし。降りて近古獨國の「ラシヨナリズム」(正理派)と稱する者、英國の「デ井イズム」(一神教)にて其重なるなる學者は「シヤフアペリ」侯、チンダル、ボリンブルウルク、ヒュトム等なり。及び佛國の「イルミニスト」(ヴォルテール、テ井、ロット、ダレム、ポルト等)の如き反對論者を見も、皆な哲學上理論を主として之を排撃せざるはあし。又近時の反對論を見るも亦然り。彼の「アグノスチズム」と稱する學者「ペンセル、ハツクスリー」等の如き、尙ほ之を信ぜざるは其哲學の理論を主とするに外ならず。唯昔時の反對者と今日の不信者と大に其趣きを異にする所は、一は人間の智力を信する大なるに過ぎると一は是れを信すること少きに過ぎると一は「ノスチック」(万事)を知り得るとするの說(説)なる一

の「アグノスチック」不可識論、智力の不足を主唱する學說なるとに在り。乃ち昔時の反對論の自己の智識を標準と爲し、己の思想に載らざることは如何なる確實なることをも之を疑ひ、是にて教に反對せしが、今の不信論者之に反し、上帝の存否、靈魂の死不死等、凡て宗教の問題に關することは、人智の上に超ゆることにて、到底人智にては孰れとも決するを得ず、故に假令上帝存するとするも、吾人に之を知るの力あしと云ふに在り。是れ双方とも一方に偏する説にて、未だ中庸を得たる者と云ふべからず。情人智の力如何を察するに、之に時間、空間、原因、結果等、先天の力あるは掩ふ可らざる事にて、又其思想の達する丈は、其運思の法に於て過りなきときは、正確と爲さざる可らず。其智識に限界ある

は勿論のことなれども、之を以て事物の實態本元を知るの力なしと云ふ可らず。人智の力如何に就ては、現今學者の間に議論喧しきことあるが、其議論の如何んを見るは甚だ面白きことなれども、唯此小篇に記載し得べからざるを如何せん。要するに不可識論者は、人の智識は始終相對のみにて、絶對には達する能はず、絶對に至らんとせば、必ず自家撞着に陥り、遂には自滅することならん。されば宇宙の大原因の如何杯相對を離れたる問題に至りては、到底其如何を定むるを得ずとし、之に反するの論者は之を答へて曰ふ已に吾人に於て人智の力如何んを云ふ、即ち實態を知るの力ある實證にして、吾人の智力に恣に限界を立つるは全く淺薄なる思想の致す所なり。人間の知識無限には非れども、其

達する丈けは確實と爲さざる可らず吾人上帝を全くに知れりといふ可らざるも又少しも知る可らずと云ひ難しと。此れ其の大畧なり。

偕て我國論者にして基督教を信納せざるは多くの未だ之が何たるを知らざるに原因すと雖も若し強ひて思想ありて之を受けずとせば其思想の「ノスチック」「アグノスチック」孰かに傾くや吾人の見る所を以てすれば其説「アグノスチズム」不可識論に傾き斯の如きことを知るは人智の企て及ぶ所に非ずと爲すもの甚だ稀れにして多くの自己の知識を大に信じ斯の如きこと信す可らずと理論を先きにして事實を後にし其事實如何ん其理論如何んを省みずして俄かに自己の思想にて臆断する者を多しとす數年來我國に

て我が基督教を駁する書多く出でしと雖も一として不可識論に基て之を攻撃せし者なく又た其事實如何を詳かにし而もて徐ろに之に論及したるものあるを見ず之を駁する者にして已に然らば之を信せざる者も更に然るや疑ふ可らず然らば則ち我國に於て基督教を論證せんとせば先づ理論に據らざる可らざるや明かあり吾人の我國民に望む所の人々私智狹識を棄て正當なる理論によらんこと即ちベイコン流の論法に従ひ公平以て眞理を究められん事なり。



第二章 神の思想及び其原由

宗教とは何ぞや神と人の關係の謂あり然らば則ち眞正なる宗教の如何んを知らんと欲せば先づ神の存在如何んを究めざる可らず若し神にして存在することなくんば基督の神子に非るは勿論天啓なるものもなく宗教もあらざるや明かなり其時こそ彼の「エピキュヤン」派の末流が唱へたる如く、食し且飲よ明日吾は死す可ければありとは、人生の眞なる哲理あらんされば眞正なる宗教、基督教の根據を究むるには先有神論より始ざる可らず。

諸て神の存在を論證するに當り余は先の神とは如何なるものを指すか之を示さんとす世人多く神の存在を以て信じ難き事となすは其神たるの思想甚だ粗漏あればなり彼の神を以て或は見るべきものとなし或は限りあるものと

あし或は人類の如く思惟するものにして神の存在を疑ふは當然のことなり若し夫れ神の思想にして果して眞實を得ることあらんか其存在の論證を待たずして之れを信ずる者多からん果して然らんには有神論の初に於て明らか

に如何あるもの之を神と云ふやを明示するは最も必要の事なりとす。

第一、基督教の神は靈にして形骸あるものに非らざるあり。神は靈なりとは、基督が第一に示し給ふ所あり我邦人は從來偶像教の中に成長したる者なり故に其神たるの思想亦た有形的にして神と云へば人間の如く肉骸を有する者の如く思惟するなり此の如き形骸を有する神の宇宙に存在せざるは明白の事實にして別に之れを辨する必要もなき

が、基督教の神は決して此の如き者に非らず、所謂る靈とは人の靈魂に於けるか如く、目之れを見るを得ず、耳之れを聞くを得ず、手之れに觸るゝを得ざる靈妙なる實跡を指すあり。世人の多くの官能の奴隸にして、目之れを見ず、手之れに觸れざれば、其者の存在を信ぜざるとと爲し、動もすれば曰く、我之れを見ざれば信する能はざるありと。豈に甚しき妄見ならずや。五官に觸ざる者豈に唯神のみあらんや。吾人の思想及び道理法等も亦五官にて知り得可らざるものに非ずや。吾人の思想感情たる、所謂る靈なるものにして、目之れを見るを得ず、耳之れを聞くを得ず、手之れに觸るゝを得ず、其思想は方形あるか、或は圓形なるか、其感情は白色あるか、或は硬きか軟きか、凡て形跡上の度量權衡は靈跡には全く意義

なきものとせざる可からず。吾人既に思想感情の實在を承認す、豈獨り神に於てのみ之を見されは信せすと云ふを得ん。基督教の反對者屢、神にして存在する者ならば、之を現はすべしと逼る事あり。豈無法の請求と云はざるを得ん。第二、基督教の神は普遍圓滿在さる所なきの神なり。有限の事物悉く其存在を其の空間に占めざるはなし。故に如何なる事物に係らず、之れが何れの處に在るやの問は當然の問なれども、在さる所なき神には斯かる問は應用すべからざるなり。世人此理を知らず、動もすれば曰ふ、神は何れに在すやと。星學者望遠鏡を以て、天の四隅を觀察し、神を見る能はずして曰ふ、此宇宙に神ありと。是れ大ひある誤見なり。神は在さる所なし、何ぞ人の如く、或は偶像の如く、或る特

別ある所に其居所を占むる事あらん。されば吾人か屢聞く所の反對者の難問たる神は何處に在すやの問は必竟無法の問たるを知らん。

第三、基督教の神の無始無終永遠無窮の者なり。世人の數此理を忘れ神の造物主なるも神を造りし者の誰れなる乎との難問を起し、斯る難問こそ必ず有神論者の閉口する者ならんと妄想することあり。神にして造られしものなりとせば何ぞ之を以て獨立絶對のものとなすを得ん。基督教者の神とするの斯の如きものに非ず。即ち無始無終永遠無窮の者あり。無始なる者ならば何ぞ之を造る者あらん。獨立絶對なる者ならば何ぞ外に待つことあらん。神を造る者あらざる可らざる杯の妄想を爲すものあらん。全く此理を知らざるに因るあり。

第四、基督教の神の全知全能の神なり。神の己の肖像に象りて人を造れりとあれば、人に肖たる所あるの勿論の事あれども、神の働を以て悉く人の働きの如く思惟するの亦大なる誤と爲さざる可らず。其思想や廣大無邊人の思想を以て測る可からず。其物を造り給へるや、人の手を以て物を作るが如き比にあらず。エホバ宣給くわが思はなんぢらの思とことなり、わが道はなんぢらのみちと異あれり。天の地よりたかきがごとくわが道はなんぢらの道よりも高く、わが思はなんぢらの思よりもたかし。ペテロ神の人に異なるを云ふや、曰く、主に於ては一日は千年の如く、千年の一日の如し。パウロ神智の深妙不可測なるを讚嘆するや曰く、あゝ神

の智と識と富は深かな、其法度は測り難く其踪跡は索ね難し、孰れ主の心を知し孰れ彼と共に識ることを爲しや、孰れ先うれに施て其報を受んや、そは萬物は彼より出うれに倚うれに歸ればなり、願くは世々榮神にわれアーメン。

從來神に關する思想甚だ狹隘ありし故、其性質に於ては人の如く看倣し、其働も人の働の如く看倣り、殊に天地創造説の如き、宛も大工が家を造るが如き思想多かりし故、彼のスペンサーの如きは、普通の創造説を以て、大工論と稱して之を嘲たり。此の如き思想は決して眞の基督教の思想に非らず。神の思想にして大ひに吾人の思想に異なる所あらば、其創造の働も亦吾人の働と其趣を異にするを爲さざる可からず。先づ神の萬物の外に在る者に非らずして、其上に在り、

且其内に在る者なり。而して其働たる機械的に非らずして有機的なり。是れ人の働と神の働と大ひに其趣を異にする所にして、吾人の深く注意せずんはある可らざる事なり。

基督教神の思想大凡そ以上論述する所の如し。其神は偶像教の神佛若しくは世俗の神とするものと異り、獨立絶對全智全能永遠無窮の大靈にして、天地間在さざる所なき、知らざる所なきの神あり。支那人の天と云ひ理と云ふもの、哲學者の絶對と云ひ無限と云ふもの、科學者の第一原因と稱するもの、皆同じく此神の一斑を云ふものにて、只其見る所言ふ所に深淺精粗の別あるのみ。

古より宗教の天下一般に行へるの一事、世の學者の普く承諾する所なるが、之と同時に神即ち人間以上の靈あり

どの信仰も、亦世に甚だ普通なる者あり。神の思想の世に普通あるや、近來學者の間に古今世に神を信ぜざるの種族あるや、否の議論甚だ喧しかり。一事を以て見るべし。今や一人種一種族として神を信ぜざるものあらざるや、已に掩ふ可らざる事實あれども、一己人として神を信ぜざるもの、尙ほ少からざるが如し。殊に我國の如き一時の事變により、宗教を蔑視するの風習甚だ盛なる所に、人間以上のものを信するの、却て例外の事の如くにして、之を信ぜざる者、却て多しとす。然れども、其實際を究むれば、理論上の無神論者の多けれども、實地上の不信者の思ひの外、少きものなり。平生神を信せざる者も、重病は懼るか、又困難に際することあるとき、忽ち之に頼ることあるの、吾人の常に聞見する所

なり。實地に在りては、無神論者を見る甚だ稀れあることなり。余の有神論の論證を掲ぐる前に、人類に神の信仰の起る原因を述べんと欲す。

第一、天地萬有は吾人に神の思想を起さしむるに甚だ力あるものなり。仰て蒼々たる限りなきの天を觀、俯して山水の美妙なるを觀、天地の宏大なる、万物の整理せるとを視れば、其思想必ず見る可からざる永遠の造物主に及ばざるを得ず。彼の大闢が天、彰上帝之榮光、穹蒼顯其經綸、分、永朝、永夕、分、仰觀其象、而知之、分、天無言、而有言、無聲、而有聲、分、不言之言、布於宇內、無聲之聲、聞於地極、と歌ひしは、唯此天地、万有の人心に上帝の思想を起さしむるの趣きを述しのみ。古より風光物色を愛するの人にして、神の思想なきもの甚だ稀なるも、

亦此理に外ならざるなり。又泰西の諺に、天文學者にして神を信ぜざる者は瘋癲なりと云へることあるは之と同じ理を云へるものにて、天地万有に神を信するの心を起さしむるの力あることを證明する者にあらずして何ぞ。

第二に吾人に神の思想を興ふるものは吾人の心なり。カント曰く、吾人をして最も奇異の念を起さしむるものは爛々たる星辰ある上の天と、人心の内部にて見ることを得る道徳の世界此ありと。万有と人心とは人類の兩天地にして、共に神の思想を起すに力あるものなり。而して人心中最も神の思想を起すに興りて力あるものは良心と宗教心あり。良心は人に善惡正邪の念を興へ宇宙に道徳の大法あることを悟しむ。道徳は即ち道徳心ある者ありて始めて世に存す

るを得、依て世に道徳の大主宰あるを覺らしむるなり。又人の性たるや、有限の物、見るべきの事を以て満足するもの非ず、必ず他に無限のものを求め、見る可からざることに頼ることを爲す、是れ人の宗教心あり。人に此心あるや、此れ神の思想の起る一原因にして、苟くも内に自ら省ることを爲すものは、必ず此世界は暗黒にあらず、見へざるの光は天地に漲ることを知るべし。ヂヤステンマル曰く、人は天然に、クリスチヤン(基督教徒)ありと。蓋し天然人性に神の思想其他基督教の教理備はるとの謂あり。此心や時に物欲罪惡に掩はれて現れざることあり、然れども吾人が靜かに一身の運命を考へ、謹嚴に天地の玄理を究むることあるか、若くは困厄危険に臨み、自然人生の奥理を探ぐるに至るときは、

必ず油然として神明の思想を發せずんばあらざるなり。司馬遷の屈原傳に曰く勞苦倦極、未嘗不呼天也、疾痛慘怛、未嘗不呼父母也、是れ蓋し人窮則反本を謂へる者にて、吾人の常に聞見するの事實あり。東洋諸國神の思想未だ明かならざりし所にありても、義士仁人が窮厄に際して神明の思想を發したるは、歴々其史乘に見る所あり。是れ人性の自然を現はせるものにて、殊に怪むべきに非るなり。

第三、歴史は吾人神の思想を與ふるの一大原因あり。吾人活眼を開いて各國興廢存亡の跡を見るときは、必ず上に大權を握り、冥々裏に宇内の大勢を統轄する者あるを知らん。支那人は之を天と云ひ、歐米人は之を攝理と云ふて、共に人間以上の力ある者の働きに歸せり。一身の履歴に於けるも

亦然り。靜かに一身の經歷を考ふるものは、必ず己より外なる者ありて、其運命を司るを見ん。蘇東坡其三槐堂銘に天の必とすべきを論するや曰く、吾聞之、申包胥曰、人衆者勝天、天定亦能勝人、世之論天者、皆不待其定而求之、故以天爲茫々善者以怠、惡者以肆、盜跖之壽、孔顔之厄、此皆天之未定者也。松柏生於山林、其始也困於蓬蒿、厄於牛羊、而其終也、貫四時、閱千歲而不改者、其天定也。善惡之報、至于子孫、則其定也久矣。夫れ儒者は今世の來世に至る試験場なることを知らず、故に天道を解くに甚だ窮したりと雖も、天道の忽にす可らざるに至りては、皆確信したるが如し。



第三章 神の存在

吾人は前章に於て、神の思想及ひ其原因を論じたるが、之より進て、此の思想は只主觀的のみならず、客觀的にも眞實なるや否や、即ち神の存在は確實あるや否やを辨せんと欲す。然れども爰に一言せざる可からざるは、吾人の神に於ける信仰たるや、必しも有神の論證に於て起るものにあらず。又其論證のみよ由り人をして神を信ぜしむること稀なることなり。さらば有神論の用は何にかある、唯主觀的神を信ずるの妄ならざるを自ら知り、且つ人にも其理由を示すに在るのみ。世人此理を知らず、動もすれば有神論によりて其信仰を起さんと圖り、之にて其信仰進まざれば、忽ちに神の存在を以て證據正確ならざることを爲す。豈甚しき誤見にあらずや。

從來神の存在を證するには、宇宙論、意匠論、實跡論及び倫理論の四を以てするを常と爲せども、今一之に依て論證するは、事冗長に渡るの嫌あるのみならず、近來學術の進歩甚だ著しく、哲學の思想稍其の趣を異にせるが爲め、從來の論證にして勢力を失なへるもの少なからず。左れば余は獨國哲學の大家ロツチエの論法に従ひ、乞ふ先づ絶對論より始めん。

情天地万有の成立する所以を考ふるに、物として變遷せざるは、あく、万物常に轉々推移變化して、姑らくも止むを見ず。彼の希臘の哲學者ヘラクリタスが、万物皆な流過すと云ひしも、實に証言にあらざるなり。然れども變化する者は、永固

なる者ありて、始めて現はるるを得、若し一物として永固なる者あくんば、争て變化現はるるを得ん、况んや永固ある基礎なくして變化起り能はざるに於てをや。夫れ變化は正に對するの變にして、化は固に對する化なり、變化は即ち比較上の語にして、絶對的に存するものにあらず。左れば天地万有の變化は、變化せざるもの存するありて始めて顯はれ且つ説明せらるるを得、是に於て乎、天地万有の變化を説明するには、永固なる基礎を承認するの必要起るなり。

万物の存在する所以を察するに、一として獨立せる者あるを見ず、皆相頼て存在するなり。動物は植物に頼つて立ち、植物は礦物に頼りて存し、有機物も無機物も天も地も一として獨立せるはなし、万物悉く他より依頼せざるものは非るあり。依頼する者何によりて存在するを得、必ず別に獨立頼る所なきの者存せざる可らず。論者或は曰はん、万物之を箇々に分つときは固より獨立の者に非ずと雖、何ぞ知らん之を合せ相ひ頼らしむるときは、獨立の者とならざるを。是吾人が數々聞く所の説なるが、眞理を誤りたる想像説と云はざる可らず。獨立せざる者を幾箇重ぬるもや、ひとり獨立せざる者あり。其數多くあるもその量大なるも、豈之が爲め其性質を變ずることあらんや。零數は幾千幾万重ぬるも、猶零たるを免れざるが如く、獨立せざるもの幾万幾億重ぬるも、猶獨立せざるものたるなり。然らば則ち、天地宇宙の存在を説明するには、吾人は必らず他に獨立絶對の原因の存することを承認せざる可からざるあり。

り。依頼する者何によりて存在するを得、必ず別に獨立頼る所なきの者存せざる可らず。論者或は曰はん、万物之を箇々に分つときは固より獨立の者に非ずと雖、何ぞ知らん之を合せ相ひ頼らしむるときは、獨立の者とならざるを。是吾人が數々聞く所の説なるが、眞理を誤りたる想像説と云はざる可らず。獨立せざる者を幾箇重ぬるもや、ひとり獨立せざる者あり。其數多くあるもその量大なるも、豈之が爲め其性質を變ずることあらんや。零數は幾千幾万重ぬるも、猶零たるを免れざるが如く、獨立せざるもの幾万幾億重ぬるも、猶獨立せざるものたるなり。然らば則ち、天地宇宙の存在を説明するには、吾人は必らず他に獨立絶對の原因の存することを承認せざる可からざるあり。

又万物の作用を見るに皆交互感動せざるはあし。地に列なる万物も天に窺まる星辰も互ひに相ひ感動せざるはなし。學者之を指して引力、光力、熱力等諸力の所業と爲す。抑々万有の力なるものは何を指て云ふ乎。物の動作なる乎。將た物を離れて力ある乎。何れにするも困難なき能はず。力の如何に於ては今日學者の甚だ其解釋に苦む所なり。細密に考案を下すときは万物の交互感動すること程不思議なるはあらざるなり。一物ありて他物を動かすことを爲すも、若し物箇々獨立のものからい争で其運動を他に及ぼすを得ん。是れ古より哲學者の其解釋に甚だ苦みし所なり。マールンシエ、ライブニツク等々各分子を以て一個の動物の如く見做し、万物互感の理を説くに、万物間に預定の調和存するを

以てせんとしたるも、到底架空の想像説たるを免れず。吾人之を説かんとせし、必らず万物を以て一大原因に歸し、其原因に基くと爲さざる可からず。此の如く天地万有の成立を究むるとき、必ず一個の大基礎大原因あるを認むるを得ん。是れ古より如何なる學派の哲學者も共に承認する所にして、世界の公論と云はざる可らず。古今學者の稱する所の名、異ありと雖も、其實の同じ。儒者の太極と曰ひ、道家の無名と曰ひ、釋氏の眞如と曰ふもの、又カントの實態と曰ひ、スピノザの「サブスタンス」と曰ひ、セルリング、ヘゲル等の絶對と曰ひ、スペンセルの不可識的と曰ひ、マックス、ミユウラルの無限と曰ふもの、皆な共に此大原因大基礎を指せるが如し。淺薄なる唯物論者の唯五官

の奴隸にして見るべきもの觸べき者にあらざれば其存在を信ずるを得ず是に依て宇宙の大原因に達すると能はざれども深遠の思想を有する者豈唯物の動作のみを以て満足するを得ん必ずや其大原因に溯らざる可らず是れ古今深遠なる哲學の其揆を一にする所以あり。然らば則ち世界の哲學者の悉く神を信する者あるや否然らず此大原因あるを信ずと雖或は之を以て只無覺の勢力とあすものあり或は其性質を以て全く知る可からずとあすものあり此原因の見解如何んか實に凡神論と不可識論と有神論の岐るゝ所あり凡神論者の此原因を以て只人類や智覺ある者の顯へすことの外全く智覺を有せざるものと爲す不可識論者の此原因に智覺あるや否や其性質如何

の人知の得て究む可きものにあらざるとなす。只有神論者の此原因を以て靈性を有し智識あり感覺ある完全なる道徳を有する大自在の神ありとす。何れの見解が最も其當を得たるものあるか乞ふ之を左に論せん。第一、此宇宙の構造運動を観察するに人知にて了解すべき秩序理法あるを見るなり。此宇宙に嚴然たる秩序理法あることい何人も聊か宇宙の動作に注意する者は必ず承認するからん彼の朱子か道通天地有形外思入浮雲變態中と歌ひしに能く學術上の眞理を解説するの言と謂べし古へ學術の未世に明かあらざりしや此天地は許多の鬼神の司る所と爲し山には山の神あり河には河の神あり雷電風雨を始めとし事々物々之を司る所の神あらざるはなむとの信

仰なりしも、今や學者の思想一變し、宇宙間に一定の秩序
 理法ありとの信仰一般普きに至れり。是れ實に學術の根柢
 にして、此信仰なくば學術の進歩望む可からず。さらば有神
 論と無神論の争點、此宇宙に秩序理法の存するや否の問
 題にわらずして、此秩序理法の無覺の勢力の自然に然しむ
 る所ある乎、將た知識感覺を有する神ありて然乎の一事な
 り。無神論者の物自然或は必然なるを云て此秩序理法を
 解説せんとすれども、自然或は必然とは何ぞや、唯事物の性
 質の然るを云ふのみ。凡神論者の或は吾人が空間の直覺に
 て幾何學を組織するが如く、實跡の性質より演繹し來りて
 此宇宙の構造組織を解説し去らんとすれども、宇宙の實際
 の甚だ錯雜にして、斯の如き單簡なる理論によりて解説し

得べきに非ず。是れ到底言語上の空論たるに外ならざるな
 り。唯無神論をして聊か道理ありやの觀を爲さしむるは、世
 人に左の如き迷信あるに由る。
 (甲)世人の大概、事物の原因を見るを得るが如く妄想し、物
 質を以て眞個の原因と思惟す。而して精神なる者、見る可
 らざる者なれば、事物の原因を解説するに、斯の如きものを
 假説するは無益の事の如く思ひ爲すなり。殊に學術の開
 るに從て物質にて解説せらるゝこと益多くなり、精神なる
 原因神を假説する必要彌減する如き感覺あり。是れ實に大
 なる誤にて、其實吾人の何の原因をも見ることを得ざる者
 り。原因ある者の唯吾人が其結果より推知するのみにて、之
 が物質たると精神たるとを問はず、肉眼以て見ることを得

ざるものなり。宇宙現象の原因の何人も之を見るを得ず。唯有神論者の其秩序理法を以て知識感覺を有するの大靈に歸し、無神論者の無知無覺の勢力に歸するの別あるのみ。

(乙)迷信の理法を以て一種物を離れて存する勢力の如く思惟す。人心に兎角に抽象の思想を以て實物の如く思惟するの弊あり。宇宙に理法存すと云へり。理法物を離れて存し、物之に管理せらるゝ如く思惟すれども、其實然るに非ず。理法の物の動作の跡よりして云ふものなり。理法始めに存し、物後に之に管理せらるゝに非ず。引力の理法は唯物と物の間に起る一種の動作を云ふのみ。物を離れて引力あるに非ざるあり。されば吾人が宇宙に理法存すと云ふも、決して宇宙の輿理を解説したるに非ず。唯造化の跡を述べたるのみ。此

理法ある動作の無知無覺なる勢力の爲さしむる所なるか、將た知識感覺を有する精神の働さある乎。肉眼の之を見るを得ず。吾人は唯其跡より推測を爲すのみ。

宇宙の秩序理法は其原因を以て知識を有するものに歸せざるを得ず。然らざれば實跡の性質よりして其秩序理法を演繹し來らざる可らざるなり。スピノザを始めとし、古へより斯の如き企を爲せしもの少からされども、何れも失敗の跡を遺さしむるのみ。物其自身を如何に考察するも、現在の世界の起る理由を見る能はず。原素の六十有餘あるは如何なる理由なるか。必然の理法は之を解説するを得ざるあり。原素にして或る原素は他の原素に親和化合するの性を有するは是れ如何ある理由や、必然の理法は之を如何んに

解するや。又引力の理法の如き最も明白ある如くなれども、之を細かに考ふる時の大なる困難あるを覺ゆ。總ての萬有力は之に近接して其動作を顯すことあれども、引力は如何に遠隔するとも、其働きを顯すことあり。是れ如何ある必然の理由に因るか。思想ある者の意匠を承認するにあらざれば吾人は之を解するを得ず。

假りに万有の理法を以て必然不變のものとして爲すも、如何して今日の如き宇宙存在し來れるや、必然の理法の之を解説するを得ざるあり。世に彼のラプラスの星霧説を以て恰も確定したる真理の如く思惟し之を以て宇宙の存在を悉く解説し得るもの、如く思惟すれども、是れ大なる誤りなり。試みに其の二三の困難を掲げん。第一大初の原素にして

平等に散布しあるものとす。之に引力存する以上の、必ず其の重力に従ひて位地を變ぜざる可からず。果して然らんに、は水素の如き最も重力の少きものは、太陽系の外に散布して、其中心にの鑛物の如き重力の大なるもののみ集合せん。是れ第一の困難なり。第二星霧説にては此の星霧か運動を始め、其周圍に數線の圓圈を生じ、其圓圈離れて諸の遊星とあるとなす。此の運動は外より與へられたるか、又は内より起りしや、困難なきを得ず。特に困難なるは此の圓圈の本體より分離するの一事なり。星霧收縮するに従つて、其運動また速ならざるを得ず。而して遠心力と求心力とは互ひに平均せざる可からず。然れども圓圈にして本體より離るには遠心力求心力よりも増加せりと爲さる可からず。

されど若し遠心力にして求心力より増加することあらば、物質は其本體より離れて四方に散亂せざるを得ず。是れ大なる困難なりとす。第三に困難なるは遊星廻轉の時間大に異なるの一事あり。例は此地球は三百六十五日に一廻轉するに、大陽より最も遠き「プチューン」(天王星)の如き百六十五年より一回轉するなり。如何にして斯の如きとある。是れ決して必然の道理にて解説せらるべきに非ず。其他空氣中の元素の調和に於けるも、又は地球成分の元素の鈞合に於けるも、一の元素にして少しく多くあり、一の元素にして少しく寡き時は、忽ち之か破壊を生じ、生物は申すに及ばず、地球の形體をも溘然壞裂するに至らん。斯の如き調和鈞合は如何にして起りしや。必然の理法は之を解説する能はず。此事

たるや必ず智覺を有する者の經綸に出ると爲さる可らず。之を要するに、爰に一個の力ありて、理法に従ひ秩序を追ひ、知識を以て運動し、万物各々其所を得せしむる、一種の奧妙なる組織を構造するは、誣可らざるの事實あり。而して有神論者は此力は知覺あるものなりと云ひ、無神論者は然らず。と爲す、何れ乎。正當なる道理は之か判断を爲さる可らず。第二、吾人進て有機體の世界を観察するとき、之に明白なる意匠あるを見るなり。例之は動物の目、殊に人類の目の如き、實に驚く可き奧妙の構造なるを見る。ペリを始めとし、近世の有神論者誰れも之を以て有神論の主眼と爲さるはなし。彼の有名なる不信論者「ミル」さへ、此論には容易に抗

敵す可らざることを公認したれば、之が甚だ有力なる論たる疑ふ可らず。然れども近來に至り此論の形状を一變したるは實に進化論の現出是なり。ダーウソンの進化論は幾分か第二原因の作用を以て此の奥妙なる意匠ある構造を解説するに足れるが如し。爰に於て乎無神論者は之を以て宗教を排撃するの利器と爲し、宗教者は之を以て宗教に反するの異説と誤認し、共に進化論に不慮の冤罪を蒙らしむるに至れり。元來斯の如きの誤認あるは世人が意匠論の趣意を詳にせざるに原因せずんばならず。

(甲)意匠論は造化の方法如何を指すに非ず、唯其結果に意匠あるを證するを得ば之を以て足れりとす。時計は機械を以て造りたるも、人手を以て造りたるも、之に意匠あるの一點

に於ては異なる所あきか如く、天地万有が進化あるか、或は特造あるか如何にして構造せられたるも、唯之に意匠あるの證跡さへあれば、其造化の方法如何は意匠論の敢へて問ふ所に非るなり。野蠻未開の民は凡てのものを手を以て造れども、開明人は最も複雑なる機械を以て凡ての物を造り、其方法の單複は却つて其知識の程度を示すことあるなり。野蠻未開の民が何の器具を用ゆるなく單線に悉く手を以て之を特造すると、開明の民が最も複雑なる器械を以て、蒸氣の力を利して之を製造すると、孰か最も知識ある製造法なる、複雑なる製造法は最も知識あるものたる、辨を待すして明かなり。されば吾人は造化の方法愈複雑なるを見て益造物主の智深さを悟ることあるのみ。

(乙)人の意匠は外より物に施すものかれども神の意匠は然らず物の内に施され内より管理せらるゝあり世人動すれば神の動作を以て人の動作の如く思惟し造化の跡に神の手の直接に顯はるゝを見るに非れば神の存在信し難しとす是れ大なる誤あり吾人は決して造化を以て人間視す可らざるなり。

(丙)世人の最も誤る所は造化に已に吾人の知る所の理法を以て解説し能はざる所あるを以て有神論の大なる證據たるが如く思惟する事是なり彼のスペンサーの如きも識る可らざるの境界を以て宗教の存する區域と爲す又從來の有神論者の多く宇宙に第二原因即ち天然の理法を以て解説する能はざるものあるを發見して有神論の論證となす。

是れ學術と宗教の紛争を惹起せる大原因にして是迄大ひに神學の進歩を妨げし所なり學術と宗教の關係は決して此の如く其區域を異にするものに非らず只其見る所を異にするのみ人間の智識大ひに進み學術頓に開け宇宙の事物悉く天然の理法を以て解説せらるゝに至ることあるも之か爲め決して有神の論證を烏有に歸するに非らず之に反して吾人は宇宙の事物を愈々明かにし其理法を悟るに於て愈々神の智能の大なるを知り有神論の證據増々明かになることあるべし彼の蒸氣車の如き吾人か其機械の構造を明かにし之が容易に運轉するの理を解説し得ればとて之れにて其發明者或は其製造者を否定すべきにあらず吾人は其理を明かにして愈々其發明者の知識の大なるを

知るなり。されば學術の進歩は決して有神論の論證を弱むるに非らず、又進化論も決して有神論の反對と見做す可からざるあり。



第四章 人類と神の存在

蘇國の哲學者ハミルトンは其大學の教場に左の如き銘を掲けたりとかや、曰く「宇宙には人類より宏大なるものなく、人類には其心意より宏大なるものはなし」と。ソクラテースは「己れを識れ」と云ふを以て學問の目的となしたり。凡そ宇宙の事物にして、人類と其心意より奇異なるはなし。無神論者は天地の成立、或は生物の發生を以て、機械的の理法にて

幾分か解説するを得ん、然れども人類と其心意とに至ては容易に解説し能はざるべし。若し夫れ天地萬有にして悉く機械的の理法にて解説せらるゝとせば、人類と其心意も機械的の作用たるに外かならざらん。然らば則ち人間の最も重する自由も道徳も宗教も悉く空想たらずんばある可からず。然らば則ち學者の説も機械的の作用なり。人殺父母に不孝なるも、萬有自然に爲す所にて別に咎むべきに非ず。然るときは世に學問もなく、道徳もなく我もなく人もなく、唯物質と其動作のみにて他に一物もあるべからざるなり。是れ即ち無神論の歸着する所にして、畢竟虛無寂滅の論たるを免れざるなり。聖書に神人を創造り給ふ、其象の如く人を造れりとあり。

是れ人の萬物の靈たる所にして、其靈魂神に似たる所あるを云ふなり。神に知識あり人にも亦知識あるなり。其知識たる動物の本能と異なり、以て進歩すべく、以て退歩すべし、又自ら方向を定むるの性質を有するなり。動物皆所謂本能なるものを有し、知識ある働を爲すか如くなれども、其の本能たる自然の發育を爲すの外、作爲を以て教育すべからざるものなり。故に蟻の埴を作る、蜘蛛の網を編む、千年以前に於けるも、今日に於けるも、更らに異なる所あり。されど人智は然らず、一個々々にて其知識を發育し得るのみならず、其知識を組織躰にして、子孫に傳へ他國に傳ふることを得る。是れ人に學問あり、又文明なるもの存する所以なり。而して其知識たる動物の本能の如く、自然必然に働くものにあら

ずして、自ら取捨し、自ら撰擇して其方向を定むるものなれば、只人にのみ過失あり、進退ある所以なり。是れ人の神に似たる所以の一なり。神に道德の性あり、人にも亦徳性あり。吾人が爰に徳性と云ふは、人に善惡正邪の觀念あるを云ふなり。其正と云ひ、邪と云ひ、其義とし、不義とする所は、時代に因り、國に因り、全く趣を異にするごとくあれども、善惡正邪の觀念あるは、古今東西同一に出づ。世の論者動もすれば、道德の念の自然に出るを難じ、文明國にて義となし、正とあす所、必らずしも野蠻國未開國にも、然るに非らず、まゝ其思想全く反對に出るあるの事實を以てすれども、是れ正當の論難となすべからず。吾人が人に徳性存すと云ふは、只其道德の念あるを云ふものに

して、何事が道德あるや何事が不道德なるや、天然に覺知するの力あるを云ふに非らず、如何なる劣等の野蠻人と雖も其道德とあし不道德とあす所は、文明の人と大に其標準を異にするにことあれども、嘗て全く道德の念あき者あるは聞かざる所あり。是れ人の神に似たる所以の二あり。天地萬有秩序整然として自然の美を具ふ、人亦た自然に美妙の性を有す。動物にして着色の奇異なるを見て、幾分か感覺を起さざるに非らず。然れども美妙の念は更らに見ざる所なり。天然の美も繪畫の妙も音楽も詩も動物には猫に小判にして何等の感覺もあらざる可し、只人は天然の美を見て喜び、或は之を繪に寫し、或は之を詩に吟じ、或は之を樂に和し、以て神明に交ることを得るなり。其美術となす所に

於ては時により所によりて大差なきを得ず。されども此觀念あるは道德の觀念と同じく、古今東西一轍に出づるなり。是れ人の禽獸に異なる所以の三なり。人は宗教の動物なり。地上の物有限の事にて満足する能はず、必らず自然以上のものを求む。富は陶朱、猗頓、クリサスに駕し、權力はアレキサンデル、秦の始皇、豊太閤、ナポレオンの上に出るも、此れにて満足す可きものにあらず。アレキサンデルは西亞細亞諸州を征服し、印度河岸に於て復た征服す可き國無きを嘆じて涙を流せり。秦の始皇は天下を一統し、万事意の如く政を行ひたれども、此れにて満足せず。不死の薬を求むるに至れり。其他豊太閤、ナポレオン等一として其權勢を以て満足せしことあし。是れ人の性あり。獨り彼等の

み然るにあらざ、何人も亦此れに同心からん。是れ人の性に
 は地上の物、有限の事にて満足す可からざるものあればな
 り。人又他に依頼するの性あり。其身軀健全万事意の如く行
 はるゝ時は、他に依る可きものは不用なるか如くなれども、
 一旦事望む所に齟齬し失敗を取るか、又不虞の災難に罹り、
 其生命も危きに至らば、忽ち他に力ある、依頼す可き者を求
 むるに至る。小兒の恐れて其父母を呼ぶ、人窮して神に求む
 る是れ性なり、性しむに足らず。是等皆人にのみ見る所にし
 て、動物には更に其形跡だも見ざる所なり。是れ人の禽獸に
 異ある所以の四あり。
 人既に心意を有し、又斯の如く高尚なる性を有す。如何にし
 て斯の如き事起るか、其説明無かる可からず。吾人の神の存

在を承認せざる以上の斯の如き現象を解説する能はざる
 あり。水源より上に昇る能はず、結果の原因に均しきか、或
 此より劣るものならざる可らず。人にして心意ある者あら
 ば其大原因も亦心意を有するものあらざる可からず。人に
 して道德の念あるものならん、此を生したる者も道德の念
 ある者ならざるべからず。是れ吾人か自然に到着す可き結
 論あり。
 夫れ人類の知識を否定するハ、無神論者も容易に爲し能は
 ざる所ならん。彼の人の精巧ある時計を造り、美麗なる畫を
 描き、奥妙ある詩歌を作る、誰か之を以て只何の意思なき目
 的なき自然力機械的の動作のみと謂ふを得ん。彼の有名な
 物理學者テンドル、はミルトン、シエキスビール詩歌の思

想を以て開闢前の星霧の分子中に現存せしならんを謂ひ
 たれども、最も迷信の甚しきものに非ざれり斯の如きとは
 信する事能はざるべし。人智にして萬有に存すとせり、萬有
 は決して機械的の動作のみにて解説す可からず。且つ世人
 人に智性あるを承認しなから、萬有に智識あるを承認せざ
 るの、亦奇と謂はざる可からず。抑萬有に智識ありとするは
 人に智識ありとする別、其理論に強弱の差異あらざる
 あり。吾人が他人に智識ありとするの、吾人の動作より推知
 すればあり。吾人は他人に智識あるや否之を見るを得ず、之
 を聞くを得ざるなり。其人と談話するも、其奇異なる音聲空
 氣中に波動を起し、之を傳て耳の鼓膜に達せしめ、遂に頭腦
 に及ぶ。吾人は之を聞て音聲に意義を與へ、始めて他人の思

想を推知するを得るなり。萬有に於けるも之に異ならず、唯
 其動作により之に知識あるを推知するのみ。論者或ハ之を
 難じて曰く、人の物を造くる思想ありて爲す、目を以て明か
 に見るを得べしと雖も、万有の物を造化する其手續を見る
 を得ざるありと。是れ亦淺薄なる思想の致す誤謬ありとす。
 例令ば人の時計を造るを見る吾人の見る所は唯筋肉の動
 作のみ、少しも思想の働さを見るを得ず。其結果に意匠目的
 現はるゝを見るに非ざれば容易に知識あるものゝ動作と
 爲すを得ざるなり。万有の意匠に於ける亦之に異ならず、吾
 人其動作を見るに、唯物質と勢力との運動のみ。然れども其
 結果に意匠目的現はるゝを見て、始めて之を爲す者は知識
 あるものなるを知るなり。

終りに臨て一言すべきは、有神論の最も力ある所は無神論の無道理なること、比較して大に道理あることあり。有神論も詳細に究むるときは種々困難なる所なき能はず、又吾人が甚た其答辨に苦む所なきに非れども、之を以て無神論の無道理にして困難多きに比すれば、天地霄壤も宙ならずるあり。フ井シヨル氏其有神論を結ぶに左の如き言を以てせり曰く

無神論は人類を輕侮するものなり。善人には必ず目的あり、正しき目的あり、彼は一己の幸福と共に世界の幸福を希望す、彼汝々汲々として此目的を達せんとを勸め、之を達せんが爲には如何ある艱難辛苦をも省ざるなり。斯の如き人に斯の如き目的を持ち之を達するは人生の神聖

なる義務なれども、彼が住し且つ其一部分を受くる所の宇宙には目的も意匠もあしと告げなば如何ん。是れ豈其理性と道德心に無法の反對を試みるものに非ずして何ぞ人には無趣意の痴戯を爲す可らず、必ず道理ある目的を達せん爲め智識ある動作を爲さざる可らずと告げながら、宇宙は目的も意匠もなき無趣意の痴戯の結果と云ふは嗚呼是れ何等の忘論なるぞ。

シヨンプ井スクハ有名ある宇宙哲學の著者あり。氏の元スペンサーの哲學を祖述し、頗る不可識論に賛成を表し居たるが、近來其の思想大に進み、斷然神の存在を主張するに至れり。近著の神の思想ある書中無神論に關し左の如き語を掲けたり曰く

吾人の理性の萬物の組織の道理的あるを要するあり。……如何なる巧みある理論も吾人をして此宇宙の無限なる主宰が吾人を永久智識上の紛亂に置くことを信ぜしむること能はず。……吾人が五官の證據に於ける信仰の如何なる場合に於ても宇宙の秩序に於て吾人が幾分か測知す可き意義あるの信仰より強きと能はず。神にして存在するなく宇宙にして悉く自然力必然の動作なりとせし第一吾人の理性を満足する能はざるなり。吾人は理性の動物なり而して此宇宙にして此理性を満足せしむるものなく、此の天地は背理の天地たらざるを得ず。第二吾人の道德の念を有するものなり。神にして存在すなくん、如何にして此念を満足するとを得ん。皆に社會より道

徳の基本を取り去るのみならず又た吾人の願望を満たす所なからん。第三吾人の力ある者に依頼するの性を有するものあり。神にして存在するなくん、此宗教心を満足せしむ可き所なし。然らば則ち無神論の科學哲學の基礎を與ふる能はず。又道德宗教の根據をも取り去るものあり。然らば則ち無神論の社會の基礎を取り去り國民の破壊を來すものと謂はざる可からず。近來歐米諸國にて世に害毒を逞ふする虚無黨、無政黨の徒類が宗教を以て大敵あるが如く思惟し、無神論を以て其黨論の楯となす、又一理あることと謂ふべし。



第五章 天啓及び其必要

世人が基督教を學ぶに當り、之を信ずるに最も困難を究むる所は天啓の一事なり。上帝の存在は之を信ずる難きに非ず、人に靈性あることは容易に之を認むるを得べし、然れども上帝自ら其神子を世に降し、人類を罪惡の中より救済すと云ふ一段に至らば、何人も其事の異常なるを怪まざるはあし。上天の事は聲も臭もなしと云ふに、上天より聲を聞くことあるは、是れ何等の怪事ぞ、天の無心なりと唱ふるに、非常の事を爲して人を救済せらるゝとは、是れ何事ぞや。吾人聖書を讀み、上帝の使者數々人に現はれて神意を傳ふるあり、又預言者なるものを起して將來の事を預言せしむることあるを見る毎に、未だ曾て其事の不可思議にして吾

人の預想外に出づるを怪まざるはあし。當時にありては、奇跡異能及び預言の如きは天啓默示の最も正確なる證據たるべきに相違なかるべしと雖も、數千年以後の今日に在りては、此等は却て吾人をして信仰に蹉跌せしむるの礙石たらざるを得ず。今や世人が基督教の天啓を以て大に信じ難しと爲す所以は、之が歴史上證據の強弱如何んを問ふて後ち疑ふに非ず、又哲學上天啓の成否を攻究して後ち狐疑するに非ず、唯何となく其事の異常不可思議なるを怪むのみ。而して天啓を以て斯の如く異常不可思議の事と思惟するは、上帝に就ての思想に頗る誤れる所多ければあり。さらば此迷霧を排斥して天啓の青天を現はさんとするには、先づ上帝なる神の性質如何を明かにせざる可らず。

學者は神を以て唯感覺なき道理原理の如く思惟し、俗人は神の敬畏すべきを知るも、雖も之が愛すべきを知らず、是れ神の存在を信するも、其天啓を信する能はざる所以なり。苟くも神を以て活潑々の神と爲し、人類の父たるものとせば、人に現はるゝとあるは、勿論常に人と共に在さざる可らず、然らば則ち何ぞ天啓を以て異常不可思議の事と爲すを得ん、是れ乃ち當然の事なり。父の子に於ける夫の婦に於ける天下の至親之より甚しきは、あし神は人類の父なり、夫なり、又其友あり、之と親密なる交際ある、固より其當然なり。且つ神は知らざる所なく在さざる所なきの神なり。天地は神の動作あり、自然法は神の意志あり、吾人は常に神の内に存在し、神に親炙するものあり。唯吾人之を見るの目なし。故に現

れざるのみ。苟くも信仰の目ありて之れを見れば、宇宙万物一として神を現さざるはなし。神初めに人を造くるや、其肖像に象りて之を造り、之に賦するに神に似たるの性を以てし、常に神と共にあり、神に服従するを以て其本分と爲せり。然れども、初人罪に陥溺するや、不孝の子、其親に遠かるが如く、神より遠り、従て之を忘れ、岐路に彷徨し、其迷惑の甚しき遂に上帝の存在をも疑ふに至る。是に於てか、人類の一部は不信説に陥り、其多分は偶像教に彷徨したり。上帝の感覺已に人類を去れり。吾人が其啓示を怪むも亦當然あり。殊に吾人をして天啓を信するに困難を増さしめたるは、歐米近世の神學者が多く、神及び天啓の思想をして、器械的ある究屈の思想に陥らしめたる事是あり。近世の神學は多く

は政治法律の思想を専にせし羅馬人の頭腦を經過し來れるより、自然法律上の究屈なる思想を帶ぶるものにて、又多少獨國の正理派神學及び英國の「デ井ヌム」(一神論)の餘習をも引き受るとありて、兎角第一原因と第二原因天然と天然外天啓と理性、人事と神事を甚しく區別し、神を天然万有の外に放逐し、宇宙人類を離れて獨立せしむるとあり、神の思想にして斯の如くならば、其天啓や又究屈ある器械的思想となるも怪むに足らざるあり、故に天啓と云へば天上に隠るゝ所の神が、神學及び哲學上の眞理を組織體にて現はすことか、若しくバ學者が其生徒に講義を爲すが如くにして一點一畫の誤なく眞理を世に示すが如き思想あり、されバ世人が其説を聞て異常信じ難き事と爲すも亦一理あり

きに非るあり、天啓は即ち人類と最も親密なる關係を有し給ふ天父が人類に現れ給ふの歴史あり、其事たる上帝と人類の間に自然に存する關係の外に現れたるものあり、故に其事たる抽象の眞理の啓示に非ず、生きてる人間に對する具躰の眞理の啓示なり、其啓示たる一模型の固形體にあらざ、進歩あり發育ある活動のものたり、未だ神を見じ人あらざ、惟うみ給へる獨子即ち父の懷にある者のみ之を彰せり、キリストは道理を以て神の存在を證明するに非ず、其身其心を以て之を彰せり、之に生あり此生の人の光なり、キリスト理論を以て道德の道を講明したるに非ず、其一生の即ち人の光となりたり、保羅一言以て基督の啓示を述べ曰く「この恩恵は今我儕の救主イエスキリストの顯れ給ひしに

由り顯れたり、キリスト死を應ぼし福音を以て生命と壞さる事とを明著にせり。

且つ天啓を以て奇異の事項と爲すに至りし一大原因ハ即ち現今の人類たる初代純白の位置より墜落したる一事是なり。蓋し人類墜落の事たる世人が容易に承認せざる所なり。若し此問題を以てアダムの罪科如何ん何故に悪魔の誘引ありし平等の難問に涉らしめば、其問や結ばれて種々難解の疑團とあり、到底世人をして満足せしむるの望みかあるべきも、唯吾人が爰に確定せんと欲する所の罪の存在のみ。吾人は必ずしも全人類は悉く罪人なりとの説を主張するにも及ばざるなり。唯人類の多分は罪に沈溺する者とせば是にて足れりとす。抑罪とは凡そ上帝の律法意志に反する

吾人の動作を云ふ。凡て吾人の良心に反する思想行爲を指すなり。強ち之に詳密なる神學上の意義を加ふるにも及ばざるなり。偕て罪の存在たる實に奇々怪々不可思議極まるの事項にして、之を承認すると共に許多の案外なる結果の相伴を見る。故に不信論者は常に種々の解説を設けて之を否定せんと圖る。無神論者は罪の感覺を以て一種遺傳の迷信と爲し、悪人の罪科を以て万有の缺漏と爲し、更に其人を咎めざるなり。凡神論者は罪を以て過と同一視し、之を以て却て進歩の段階と爲すあり。是を否定するの結果たる遂に善人悪人の區別を滅し、聖人と惡漢とを同一視し、世の道德を廢するに至るを悟らざるなり。豈に恐怖すべきの至りならずや。罪の存在は實に吾人の意識を照らして最も明晰な

る事實なり。之を一己の經驗に照すも、之を全人類の歴史に
 徴するも、掩ふ可からざるの事實あり。人其隣の鶏を竊むわ
 り、隣人之を責むるも竊盜の罪を以てす。其人芒々然として
 答へて此れ我が過なり。罪に非ずと云は、如何無神哲學者
 は或之を以て適當の答と爲すあらんも、吾人は之に感服
 する能はざるあり。過と罪との間には千尋の溪谷あり。世の
 不信論者は種々の工夫を廻らして此溪谷を埋めんとする
 も、到底徒勞の工事たるを免れざるあり。
 已に人類の多分は罪惡の海に沈溺するを以て正確なる事
 實とせば、世人が天神赫々上に照臨し給ふを忘れ、其交通た
 る天啓默示を以て奇怪信じ難き事と爲すも亦當然の理
 なり。人類にして若し墜落せしとあからんか、天人間の交通

は天然の父子に於ける如く、後來迄も替はるとあく、自然親
 密に繼續せしならん。然るに人類は其初代に於て罪に墜
 し上帝に離れしことあり。是れ即ち天啓默示を以て世人が
 異常の事變と爲すに至るのみならず、亦特別なる天啓默示
 の起る所以あり。
 是に由て之を觀れば、人類の罪に陥しことは、是れ天啓默示
 をして異常ならしめ、且つ此必要を來したる最も大なる理
 由なるを知るべし。己に神人間の交通絶たり、愛ある神存在
 し給らば、必ず其造化の冠たる人類を放棄せざるべし。必
 ず再び神人間の交通を開き之を罪惡より救濟するの道を
 立て給ふや疑ふ可らず。
 以上天啓論の大畧を述べたるが、是より進で其細目に涉り、

天啓の必要を述べざる可らず。人の此世に在るや何處より來り何處へ行を知らず、又何の目的ありて此世に存するやを悟らざるなり。若し東海道を通過するの旅客に向て、君は何處に行き給ふやと問はれ、一人として之に答ふる所を知らざるものあきは明白の事なるべけれども、此世界を通過する生涯の旅客に向て其目的を問はれ、多くは懵然として自失するあらん、是れ輕重權衡を失せるの怪事なるも、唯普通の事實たるを如何せん。唯人行路の險難なるにより、偶其目を醒まして眼光を幽冥の境に注ぎ、思想を超理の域に及ぼすあるも、頑然たる天地は其至情を慰むるを得ず、又悄然たる同胞人類は其願望を充す能はざるより、數々失望の沼に陥ることあるを見る。

噫万有の無情なる何ぞ一に爰に至る乎。吾人此世に在て神を知らず、死生の理を辨ぜずんば、吾人は佛者の如く、此の世を以て苦空無常の惡世界と觀せざるを得ざるなり。吾人は死するを以て寧ろ其最大幸福と思惟せざるを得ざるなり。科學者は宇宙の秩序意匠あるを以て意識ある大原因の存在を證明すと雖も、吾人の願望する所は吾人と親密の關係ある上帝の存在あり。哲學者は宇宙の大原因を以て終に全知全能の神に歸すると雖も、吾人が欲する所は神の存在の證論に非ずして、神と生ける關係の起らんことなり。吾人は如何に哲學上或は科學上上帝の存在を證明し其性質を攻究するとを爲すも、之にては吾人の至情を満足せしむるを得ざるなり。さらば如何にせば可

ならん乎、上帝親からの啓示なかる可らず、上帝人に現
 はれ愛を以て吾人と親密なる關係を立て給ふにあらざん
 ば、吾人の望や遂ぐる能はざるあり。是れ天啓默示のま
 かる可らざる所以の一なり。
 暗夜に暗礁多ほき危険なるコルンウオールの海邊を航し、
 而して破船の災害を免るゝを得るは何ぞや、是其海岸に
 燈明臺ありて其航路を照せばあり。吾人一生の航路たる、
 其淺瀬暗礁多き之が險難なる、啻にコルンウオールの海
 邊の如きに非るあり。世人多くは昏迷にして世路の險惡
 なるを覺らず、又足下は無間の地獄たるを知らざるなり。
 故に茫然平氣の思を爲し、揚々得意の色を爲して此世を
 渡るを常となせども、是れ所謂の盲者千尋の淵に臨む者

にて、其危きと一髪の千斤を掛くるより甚しと謂はざる
 可らず。暗夜に航海を爲す者には燈明臺あり、世路の危
 險なる航海を爲すに道德の燈明臺なくして可あらんや。
 古來孔子釋氏を始めとし、人倫の道を明かにし、世路を
 照らすの光と稱するもの少からず、然れども何れも一世
 或一地方若くは一入種の光にして、所謂「凡ての人
 を照す眞の光」に非るなり。故に其教たる一時代に適す
 るも他の時代に適せず、一國に應ずるも万國に應ぜざる
 あり。天下交通なく列國各其知識學問を異にせし時代に
 は、或は一時斯る教に依も尙ほ可ありと雖も、今日の如
 く各國互に交通し、知識學問天下を一統せんとするの文
 明の代に在りては、固より世の光たるを得ざるなり。吾

人の要する光は天下万世に通じて不都合なき眞の道德にして、且つ億兆の標準教師たる活聖人の世に存せんことなり。道德は活機なり、規矩準繩以て人に示すを得ず、抽象の道德論は哲學上に幾何の價値なきに非れども、實際の道德には何等の益をも爲す能はざるものあり。唯吾人に向て燈明臺たるを得るものは、神人合一至徳至善所謂る億兆の君師たるべき人の世に出てんことあり。斯の如き聖人世に出て、其一言一行世の教訓たるを得、吾人に先つて自ら其道を實踐して吾人を教導することを爲さば如何ん、是豈眞の燈明臺に非ずして何ぞ。如斯の人如何にして世に出ることある、不完全なる人類より出てんこと固より望む可らず。是れ天啓默示のなかる可らざる

所以の二なり。

幸に凡ての人を照す眞の光ありて人道を明かにし、吾人の先導を爲すものあるも、吾人をして罪の束縛を脱せしむるの道あるに非ずんば、吾人が安全の航海を爲さんと固より期す可らざるあり。人の惡を爲すを見に、強ちに之を好て爲すに非ず、之が惡たるは知ると雖も、之が行ふ可らざるは悟らざるに非ずと雖も、恰も其身已に罪の奴隸となりて他事を爲すこと能はざるが如く、止むを得ず之に従ふなり。聖書に斯る有様を指して惡鬼につかれたる者とせり。世に鬼注と稱するものあり、其學理的の解釋如何は知る可らずと雖も、之に注れたる者は自己の意志を失ひ唯其者の似擬を爲す、世の惡を爲す者も之

に異らず。譬へば爰に竊盜を爲す者あらん、其人竊盜の爲す可らざる、之が悪事たる疾くより承知する所なるも、一旦之が罪を犯すことあるや、慣習性となり、己れ之を好まざるも他の意志ありて悪を爲さしむることある如く、止むを得ず之を犯すに至る。斯の如きは唯竊盜姦淫の如き著明ある罪科にのみ限るに非ず、凡ての罪に於けるも亦然り。故にキリストが當時の人を指して、爾曹は罪の奴隸なりと云ひしも亦實に適當なる言と謂ふべし。尙ほ委く之を云へば、吾人は恰も水に溺る人の如く、又饑渴に迫り死に瀕する人の如く、罪惡の海に漂ふて之を避くる能はざるものあり。吾人の靈魂を養ふべき眞正の食物なく、常に道德上の饑渴に迫る者あり。彼の保羅が「噫

我困苦人ある哉この死の躰より我を救ん者は誰ぞや」と叫びしは、此有様を深く感じたればなり。古へより深く道德に注目する者は何れも此有様を悟らざるはなし。夫吾人の道よ於て難する所は之を知るの難きに非ず、之を行ふの難きにあり。之を行ふの難きに非ず、其心を得るの難きにあり。吾人は如何にして其心を得る乎、是れ何人も問ふ問題なれども、未だ之が適當なる答を爲すものあるを聞かざるなり。否や吾人に於て最も必要あるは救なり、吾人をして罪の束縛を脱せしめ、惡鬼の權を逃らしむるの救なり、吾人を罪惡の海より救ひ上ぐるの救なり。然れども斯の救は何れより來る乎、必ず上より來らざる可らず、人力の及ぶ可らざる者たるや明かなり。是

れ天啓黙示のなかる可らざる所以の三なり。
 吾人をして幸ひに罪の權より脱せしむるの法あるも、若し過去の罪を赦され、且つ之を抹滅するの道あるも、若し争で其心に平和を受くるを得ん。然かのみならず、過去の罪にして到底赦免せらるゝの機なくんば、悔改して善に進むの望も亦ある可らず。吾人は天上天下何れの處に於て乎、其罪を赦さるゝの例証を見を得る。万物の理法は甚だ緻密嚴重にして、其原因結果の相影響する其間髪を容れざるなり。若し夫れ聊かにて一理法を敗ることあらば、其結果忽ち現はれ來りて適當の應報を受け毫も差ふことあらざるなり。物質界の理法已に然り、道德の理法豈に獨り然らざるの理あらんや。或は曰く上帝至仁

至愛億兆を憐憫し給ふものなれば、人にして罪を犯すも之を改むることあらば争で其罪赦されざることあらんとは一應理りあること如くなれども、進て之を考ふるときは、大に然らざるを知らん。盆水一たび覆れば復た之を盛るを得ず、既往は再び來たす可らず、一旦已に罪を犯したらば之を悔るも及ばざるなり。將來を改むるも既往は如何ともすること能はず。且つ上帝の命にして徒にせられしことあれば、然るべき理由なくして赦さることある可らず、上帝至仁なりと雖も、適當なる理由なくしては徒に之を赦すことあらんや。是に於て乎世人は罪人の現政府の法律に於けるが如く、苦行難業を爲して其罪を償はんことを圖る。是れ世の偶像教にて多く苦行難業

を爲し、若くは功德を積んで其罪を抹さんとする所以なり。彼の印度にて健脛を有しながら、膝を以て數千里の難路を行き、流血淋漓たるを致すは何の爲め乎。又我國にて巨萬の金を投じ、壯嚴ある神社佛閣を經營するものあるは何ぞや。皆な其罪を抹滅し未來の幸福を求めん爲に非るは亦し。然ども難業苦行過去の罪を抹滅するの力ある乎。功德の行爲其罪を償ふの價直ある乎。功德の行爲は人間當然の務にて其分に餘るの價直あるものと爲す可らず。殊に功德の爲めに功德の行を爲すは、其心術已に正からず、争で上帝の心に叶ふことあらん。又何の必要もなく殊更に難業苦行を爲すは是れ自ら其身心を毀損するものにて、何の價直もなきのみならず、其罪復輕ら

ざるあり。然らば則ち如何せば可ならん、自然と理性は赦罪の道を顯はすことをせざるなり。天啓默示にて顯さるゝにあらざれば、吾人は唯失望に陥らんとあらんのみ。是れ天啓默示のさかる可らざる所以の四あり。以上四個の必要より之を究むるときは、天啓默示は唯當然あるべきとあるのみならず、必ずなかる可らざるの事たるや明かあり。吾人已に宗教の性を有し、仄に上帝の存在を認むると雖も、上帝吾人に現はれ給ふにあらずんば、争て其心を満足するを得ん。吾人は自然に多少の光を有せざるに非ず、然れども上帝神人合體の人を現はし其道を示し其例を顯はすにあらざれば、到底完全の光を見るを得ざるあり。吾人は完全の光を見るも、已に罪惡

に沈溺し、罪の罰、罪の權は共に吾人を壓倒す、如何に奮起するも争て此鐵鎖桎梏を破るを得ん。上帝の御子其天位を棄て此下界に下り、忍び難きの輕侮耻辱を受けさせ、其無限無量の慈愛を現はし、罪の償を爲し給ふてこそ、吾人は其目を醒まし、其力を得、上よりの能に依て此罪惡より救はるゝを得たるなれ。是れ理の最も見易き所にて自然に到着すべき結論なり。

今基督教は實に斯の如き天啓默示と稱するものにて恰も吾人の理性に適合するものなり。嘗に其天啓默示のみ然るに非ず、天啓默示の方法順序も亦道理に合ふものなり。古來世又天啓の宗教と稱するもの少からず、然れども此等は唯正確なる歴史上の基礎なきのみならず、天啓とす

る所のもの吾人の理性に合はざるのみならず、其天啓の方法順序に於て亦其當を得ざるものなり。彼のモハメツドか多年山間に引籠りて神の啓示を受けたりと云ふが如き、彼のバラモン教の默示と稱するものゝ如き、之か適例ありとす。基督教天啓の方法順序たる大に之に異なり、之が吾人の理性に適合するの如何は請ふ之を左に陳せん。天啓の必要なる理由已に之を論ぜり。天啓よして果してなかる可らざる事とせば、吾人の望む所の天啓は如何なるものある乎。神眞理を世に現はし給ふに彼のモハメツトか天啓を受けしと稱する如く、抽象の眞理を顯はし人に天意を示し給ふが如き、固より想像す可らざるに非ず。然れども斯の如きの啓示は嘗に吾人の理性に適合せざる

のみみならず、又吾人を類の需要を充たす能はざるなり。吾人の要する天啓は唯抽象の眞理天意の如何に非ず、吾人の最も要する所は救なり、生命なり、吾人を罪惡より救ふの能力あり、吾人を活かすの生命なり。而して斯の如き救、生命は如何にして現るゝを得る、上帝親から人に現はれ、至仁至愛を以て人に臨み、神人間の聯結を爲し、大能を以て之を救済し給ふに非ずんば、得て望む可らざるなり。是れ乃ち基督教の天啓にして、此が他の教に異ありて理性に適し其情願を満足せしむることある所以なり。

或曰く上帝全知全能、何ぞ人を救ふに神子を世に降し罪の贖を爲すが如き煩を取るに及ばん。若し人を罪惡より

救いんと欲ば、大能を以て直に人性を變ずるゝ如かず。人間すら大知あるもの醒醒たる小計を爲さず。况んや宇宙の主宰たる上帝に於てをや、何ぞ人を救ふに斯の如き小計を用るを爲さんど。是れ神人の關係如何んを知らざるより起る謬誤なり。抑受造物に物あり、有心者（人類及天使の如きものを云ふ）あり。物は上帝の直接に造化管理する所にして、有心者は間接の管理に屬す。何となれば物には自己の動作あく全く上帝の動作の影響なるも、有心者は然らず自由の意志あり、自己の動作ありて、動もすれば上帝の意に逆ふと爲すとあればあり。故に上帝物を理管するや其法機械的たり、又機關的たり。されど有心者を管理するの法は全く之と趣きを異にして道徳

的たるなり。固より人は靈軀のみにあらず、肉軀もあれば、其有形的の部分は機械的機械的の管理に属する故、單純に神人の關係は道德的ありと云ふを得ずと雖も、上帝人を救濟するに當り、機械的方法に依らず、道德的方法を用ゆるは當然の事と爲さざる可らず。天啓救濟の方法如何の問題は其事の成否に關するに非ず、唯孰れか最も自然の理に合ふべきや否に在るなり。上帝人に賦するに自主の性を以てし、之をして自ら善惡を撰むの責に當らしむ、而して機械的の統御を爲すことあらざるなり。其罪を犯し上帝より離れ沈淪の人類とあるや、神之を救ふに道德的方法を用ゐて、機械的手段に依らざるは亦當然と謂ふべし。

基督教天啓の信すべき事たるは、唯其方法の吾人の理性に適合するのみならず、之に順序段階あるとなり。昔は多の區別をなし多の方をもて預言者によりて列祖に告給ひしがこの末日には其子に託て我儕に告まへり「(來一〇一、二、)とは此れ基督教天啓の順序段階なり。神は突然猶太國に神子を降だし給ふに非ず、夫れ之を爲し給ふや順序あり段階あり、人罪に陥るや忽ち之を救ふの備を爲せり。洪水を以て先づノハの一族を救ひ、其苗裔にて敬虔なるアブラハムをウルの地より導き出だしてカナンの地に至らしめ、其子孫より救主を出すの約を立て給ふ。其子孫久しく埃及に在りて窮厄に沈み居たりしが、モーゼは神命によりて之を救ひ出だし遂にカナンの地に

還らしめ、イスラエルの一國を建設せり。是れ實に救主の降るべき撰民の始にして、爾後神は多くの豫言者を降だして一は當時の人を誡しめ、一は將來に向て救主の降るべきことに望を屬せしむ。時宛も羅馬の天下を一統せし比に際し内ち猶太に在りて救主を受くるの準備已に整ひ、外世界の列國に於ては人為の宗教已に勢力を失ひ、復た人心を收むる能はず、人民暗に新教の現はるゝを待ち居り、羅馬の政治は天下に行はれ、交通の便各國に普くなり、希臘の邦語廣く當時の世界に行はれて、人々自在に思想を通ずるを得るの時に當り、亞細亞の西部にて容易に歐羅巴亞弗利加の兩州に通ずるを得るの地なる猶太國に於て、神は此約束の救主を降し給へり。而して其

教の順序たる神モーセを以て律法を立て、之を以て人道の如何と自己に罪あるを知らしめ、キリストを以て恩寵を現はし、其救を得せしむるに在りとす。舊新兩約の關係恰も儒教小學大學の教の如く、相待て其全きを得せしむ。神キリストを現すや決して一日の故に非ず、久しく先きに準備することを爲して之を現はす。其啓示や整然たる順序段階あり。吾人之によりて基督教天啓の彌信すべき事たるを知るあり。



第六章 基督の神性

天啓默示にして愈必要なりとし、而して之にして愈神自

らの現示たらざる可らずとせば、神の子即ちキリストの出現ある當然の事と爲さざる可らず。凡そ事物を討究するに二個の法あり、即ち演繹歸納の二法是なり。吾人は已に前章に於て、演繹法に基き、先天の理法に依り、道理上天啓の必ずあかる可らざる所以、即ちキリストの出現せざる可らざる理由を掲げたり。其論証にして愈正確ありとせば、神性を有するキリストの出現あるは勿論、キリストに關する歴史上の事實は、必ず先天の道理上、合理當然の事と爲さざる可らず。吾人之より全く觀察の點を變じ、歸納法に基き歴史上の事實に従り、實際天啓なるものありたるか、即ち神の子キリストの出現ありたるか、又彼の聖書に見る所のイエスは果して神子ありや否、

歴史上のイエスを如何に觀察すへきやを究めんと欲するなり。

イエスカイザリヤビリビの方に到りしとき、其弟子に問て曰けるは、人々は人の子を誰と言や、彼等いひけるは、或人はパプアスマのヨハ子、或人はエリヤ、或人はエレンミヤまた預言者の一人ありと言へり（馬太傳十六章三十四節）と。是れキリストの時代のみなならず、今日に至る迄人々のキリストに就き彼此評論する所なり。或人は方便家なり、或人は聖人なり、又或人は預言者なりと言ふものあるは、是れ吾人が數聞きし所あるが、果して確乎たる基礎あるの言なる乎。將彼弟子の一人なるペテロの言ひ顯したる「キリスト活神の子なりとの信仰の確實を

る乎。請ふ試に聖書にて見る所のイエスの言行事業如何を觀察し、其性質如何を究め、以て此問題を判定するをせん。但しキリストを論するに吾人の聖書を以て誤りなきものと爲すに及んず、又之に記載する奇跡異能の事は信す可らずと爲すも可あり、唯通常の古史を讀むが如くにして其大體の事實を眞實なりとせし不都合あり。余の斯の如く四福音書に載する事實の大體を根據とし、専らキリストの品性言行及び事實に付て觀察を爲すべし。吾人がキリストを觀て最も奇とする所の其奇跡異能に非ず、其言行事業なり、其品性心事なり。四福音書を讀て唯た奇跡異能の不可思議なるを知りて、其言行事業其品性心事の不可思議なるを悟らざるもの具眼者に非るなり。

り。世人概ね形而上の眞理を區分するの智力に乏く、形而下の事にてあらん秋毫の末をも觀るを得べしと雖も、事苟も形而上に關するにあらば、興薪の大をも見る能はず。此を以て聖書を讀もの唯有形の奇跡にのみ着目して無形の奇跡を觀る能はず、忽ち此に礙くことを爲す、豈に嘆ぜざる可けんや。キリストの言行事業其品性心事の不可思議なる、有形の奇跡異能に勝ることあるも決して劣ることあらず、請ふ左に其例證を掲げん。

第一。吾人キリストを觀て甚だ奇とする所は、其出所其教育其生涯の其事業に比して甚だ不釣合ひなることなり。凡そ人の生涯に影響を及ぼすの大あるは其身に接近せる事情に若くはなし。古より英雄豪傑の其身を立つるを見

るに、其身に接近せる事情之を助成する多きを見る。然るにキリストの出所を見るに、ダビデの子孫と云ふの外、其一身に接近せる事情一として其大業を助成するものあるを見ず。其家の僅かに露命を繋ぐに足る貧困のものなり。其生長せし所の人々のナザレより何の善きもの出でんやと賤むる僻村なり。其父は大工の賤業を營むものにして何等の位階位置あるに非ず。而して斯の如き所に生れ斯の如き事情の内に生長し、遂に世を救ふの大業を企つ亦奇と謂ひざる可らず。

又古より英雄の大業を成就するに至るの多く其教育の然らしむる所にして、或は弘く諸國を遊歴して智識を求むることあるか、或は良師を叩て識見を啓くことあるか、

或は非常の苦行難業を爲して其心膽を練ることあるを常とす。彼の孔子の老聃に學び、釋迦の雪山に艱苦を嘗め、モハメッド幼に志て諸國を遊歴し、後ち山に引き籠りて大に發明する所ありしが如き即ち是れなり。然るにキリストの生れて三十年に至るまで猶太人の習として時々エルサレムに上ことあるの外、曾て他國に遊ひしを見ず。又其郷里の村夫子に就て聊かの讀書習字位の學びしことあるやも知らざれども、曾て有名なる師に就て學びしことあるを聞かず。猶太人がイエスに驚きて發したる言は即ち「彼は大匠の子に非ずや、此人は未だ學はず如何にして書を識るや、如何にして此人に斯の如き事あるか、誰より此智慧を授られて斯くふしぎなる事をも其手より行

すかゝ等あり。誰う靜心キリストの言を聽き其行を視るもの、同じ疑題を發せざるものあらん。又キリストの生涯を見るに、其三十年間の其父母と共に居り、自ら其職業を營めり。三十年に至て始て世に出て教を傳へしガ、僅か二年半若くは三年にして、最も耻づ可き刑戮に罹て其一生を終へり。然るに其教は布て万国に及び天下蒼生の救となり、其業は垂て万世に亘り億兆の仰いて以て其生を安する所となる、何ぞ夫れ斯の如くなる。夫れ孔子は教化を施す數十年、七十三歳にて其身を終ふ。釋迦ツクラテース亦頗る長壽、且つ教化を布きし年月も短からず。然り而して其功キリストの万一に及ばざるものは如何ん、是れ亦奇からずや。

第二。吾人のキリストを觀て賞嘆措く能はざるは、其道の高尚秀逸なる所なり。キリストの道德たる決して他の聖人賢者と比べ論す可らず。豈惟民哉、麒麟之於走獸、鳳凰之於飛鳥、太山之於丘垤、河海之於行潦、類也、聖人之於民亦類也、出於其類、拔乎其萃、自生民以來、未レ有盛於孔子也。此れ有若が孔子を頌讚したる語あるが、キリストの道德の盛なる更に之より甚しとす。夫キリストの道德の秀逸なる所多しと雖も、吾人の最も注目すべきは其道德の衆美具備せること、其自然單純なる事なり。世の賢者聖人たる者の道德を見に、多くは一方に僻する所ありて、其中庸を得る極めて難しとす。智ある者は勇に乏しく、義者は狹隘に流れ易く、仁者は寛

裕に失するの弊あり。人にして衆徳の完備せんことは到底望む可らず。是れ彼馬琴が仁義禮智信等の八徳を八人に抽き出し、八犬傳ある者を著はせし所以なり。然るにキリストの人となりを見るに、仁あり智あり勇あり、寛大にして狹隘ならず、順良あると鵠の如く、智きこと蛇の如し、衆美一身に集り、諸徳形骸を爲て彼に住めり。税吏罪ある人と交りて懇々教を説き、學者「パリサイ」の入を恐るゝことなく侃々其偽善を責む。殿に在りて牛羊を賣る者兎銀する者か殿中を穢すを見ては、憤激に堪へ兼ね、繩を以て鞭となし之を追出し給ふ。橄欖山より城を望めば之を憐て噫エルサレムよエルサレムよとの歎聲を發し給ふ。吾人何れの處にか斯の如き人あるを見る。

キリストはヒマレヤ山の群山の上に聳へる如く、他に其類あらざるあり。
 加之吾人キリストの道德に尤も奇とする所あり、之か自然單純ある一事なり。孔子の道德は頗る高尚にして具備せらるるか如くなれども、其爲す所語る所を見るに、甚だ作爲勉強に流れたる所多きを覺ゆ。誰か郷黨の篇を讀て、其道德の齟々區々たるを感ぜざる者あらん。然るにキリストの道德たる全く之に異なり、自然にして無爲、單純にして清淨、曾て其間に作爲勉強の跡あるを見ず。之を以て世の道德家に比するに、造り花と自然の花との差異あるを見る。斯の如き道德ハ勉強以て至るべきものに非ず。西人の言へる如く作りしに非ず生れしなり。何故にナザ

レに斯の如き善きもの生れしや亦奇と云ひざる可けんや。」
 第三。キリストの一生に於て甚だ奇訝に堪へざる所は、其
 自己宗教の性質の特別なるに在り。凡る眞實なる宗教の
 必ず其始めを悔改に發せざるべし。バプテスマのヨハ
 ン猶太の野に在り叫て曰けるに、「天國は近けり悔改め
 よ」と。神の御政治を受くるには先づ悔改の門を過ざる
 可らず。キリスト自身も亦同じ教示をなせり。(太四〇十
 七、)且つ彼の有名なる山上の垂訓に、「心の貧き者の
 福なり天國の即ち其人の有なればなり」との言を以て第
 一とせり。其意蓋し前上の教示と異ならず。而て悔改の
 心を發するは、罪の觀念之か源なり。罪の觀念深からざ
 れば、悔改の心切ならず、然らずんば争て一身を神に委任

するとあらん、是宗教の始め悔改に在る所以なり。され
 ばにや古より眞實なる宗教者は、何れも罪の觀念深く悔
 改の心切ならずはなし。古今宗教の知覺にして其鋭敏
 なる、恐くは彼のマルツスのソウルに及ぶもの亦からん。
 而して彼が常に唱へたる所は如何ん、即ち「罪人の内我
 は首なり」との言是あり。又た近世に於て宗教上に功勞あ
 るは、獨逸の宗教改革者マルチンルウテルに如くはあし。
 然るに同氏の宗教たる、罪惡の念甚だ深く、悔改の情實
 に切なり。誰か氏の傳を讀て、自己の罪惡を感ずるの深
 きに驚かざるものあらん。其他宗教の歴史に芳名を遺し
 たる眞實なる宗教者の經驗を觀るに、罪惡の念何れも深
 からざるはなし。而して此觀念は獨り基督教に限るに非

ず、何れの宗教にも多少顯れざるはなし。彼の多善教主
 義の最も甚しき儒教に於てすら、孔子は徳之不脩、學之
 不講、聞義不能徙、不善不能改、此吾憂也と、自家の
 眞實なる心情を吐露したるに非ずや。又彼釋迦は罪と苦
 を混合せし人なるが、此世に苦み多きを感じたるの甚しき、
 自己の富貴に居に安せず、之を棄て獨り雪山に隠れて難
 行苦業以て解脱の法を求めし程なり。此觀念は實に凡て
 宗教の起初にして、眞實の宗教行はるゝ所に之を見ざる
 はなし。

然るにキリスト自家の宗教を観るに、吾人の甚た奇とす
 べきは、更に悔改の心なく、少しも罪惡の念あるを見ざ
 る事なり。キリストは俯仰天地に恥ぢず、神に對し人に

對し一點の罪なく一點の過亦し。人彼に罪を誣ることあ
 れば乃ち曰く、「爾曹のうち誰か我を罪に定むる者ある
 乎」と、唯口以て其無罪を證言するのみならず、其意識其
 行爲之を證明するなり。キリストに實際罪過なかりしや
 否は他の問題に屬すれば、今爰に之を究めずして可なり。
 吾人か爰に明にせんと欲するは、キリスト自家に罪惡過
 失の念なく、従つて悔改の狀なき事なり。キリストの幼
 より死に至るまで、曾て自己の過失を悔ひし跡あるを見
 ず。又曾て罪の感覺ありたるを見ざるあり。其宗教は他
 人の宗教の如く悔改に始りしに非ず、悔改なきの宗教な
 り。其他人の宗教の如く、恒に罪惡との戦争にて屢敗を
 取るか如きものに非ず、多くは平和にして往々戰あるも

常に打勝の宗教なり。世人は皆な罪人と云なから己には罪なしと唱へ、人には皆な悔改めずは天國に入る能はずと教へながら、己には悔改すべき事あしと爲す、是れ何人ぞ、豈に奇跡の人と云はざるを得んや。世には其道徳心已に腐敗を極め、宗教の念更になく、罪惡の感覺甚た遲鈍にして、偶己の罪惡を知らざる人なきにしもあらざれども、活きたる良心を持ち、聊か宗教心あるものにして、未だ罪惡の念なきものあるを見ざるなり。○キリスト夫れ狂者なる乎、將た道徳心已に腐敗し、宗教の念更になきものなる乎、嗚呼何ぞ夫れ其の宗教斯の如く異狀なる。

第四。○キリスト自ら唱ふる所は實に空前絶後他に其例を見ざる非常の稱號あり。今其二三を擧れば曰く、「我は復

生なり生命あり」曰く「我は世の光あり」、曰く「我はアブラハムの有ざりし先より在る者なり」、曰く「我と父とは一なり」、曰く「我はユダヤ人の王なり」。此等は多くの言より抜きし者なるが、靜かなる心を以て之を讀む者、誰か其異常あるに驚ざるものなからん。随分世には偽聖と稱し、神托を受けたりと唱へ、世人を瞞着せんと圖るものも少くらざれども、未だ正氣にして神の子世の光杯、異常の稱呼を爲せしものを聞かず。勿論狂人にして斯の如き言を唱へしものあるは屢聞所なれども、其狂者たるは忽ち其言行の不調子あるに因て現はる。○キリストに於て最も奇とすべきは、キリストは唯斯の如き異常の稱を爲すのみならず、其意識行爲も亦之に準じ、更に之に撞着する

所あるを見ず。人に教を爲すも人に對するにも、奇跡を行ふにも、其意識の常に我の神の子あり、世の救主なりとの一にして、更に變化あるを見ず。若し尋常の人にしてキリストの如き稱を爲さば、其狂妄なる一見辨別するを得べしと雖も、キリストに於ての斯の如き稱呼を爲すも、更に不釣合不調子あるを見ざるあり。此意識此行爲の異常あるを見ば、盲者の目を開き、癩病を清め、徒跣海上を歩むの奇跡も、決して異常と爲すに足らざるなり。キリストは如何にして斯の意識を得しや、若し迷信にて斯る意識に達せしとせば、其迷信は何れより起りしや、其原因なかるべからず。吾人は何れの所にあるも、斯の原因を發見すること能はざるあり。是れキリストの一身

に於て最も怪に堪へざる所あり。

第五。キリストの一身に於て次ぎに奇とすべきは其思想。其教の純全にして、天下古今に通じ誤謬なき事なり。誰か其國の風俗慣習に拘束せられざるものあらん。誰う其時代の思想を全く脱却したるものあらん。古今絶倫の卓識哲人少からずと雖も、一として全く其國其時代の思想を脱却する者あるを見ず。孔子の見識尋常ならずと雖も、到底周時代支那の聖人たるを免かれず。釋迦の眼光赫々として光ある他に比すべきもの少しと雖も、尙ほ印度二千年前の佛者なるに外ならず。ソクラテースの哲學新たに一軌軸を開きたりと雖も、畢竟希臘時代の哲學者たるに過ぎざるなり。然るにキリストは千八百年前に生れ

たりと雖も、千八百年前の人に非ず。又猶太ガリラヤに
 成長せしと雖も、ユダヤガリラヤの人に非ず。曾て當時
 の思想に拘束せらるることなく、又更に其國在來の慣習
 に掩ひるることなく、巍然として千古に卓立し、嶄然と
 して一國の範圍を脱し、其言ふ所は古今に通じ、其教ふ
 る所の万国の模範たり。キリストの時代尙迷信少からず、
 然れどもキリストに迷信あるを見ず。猶太人たる己を撰
 民となし他國を以て異邦とし、自尊卑他の風最も盛なり。
 然れどもキリストは更に此風習に箱束せらるることなく、
 四海兄弟の義を教ゆ。是豈に奇と謂はざる可けんや。キ
 リストは何れより如斯の思想を得しや、吾人の之を解釋
 するの道なきに苦むあり。

キリストの教旨の如何んか爰に一論及するを得ずと雖
 も、之が純全の眞理たるの例証を示さん爲め、左に其二
 三を掲げん。第一吾人のキリストの教に稱嘆措く能はざ
 る所は、神即ち造物主に就ての教理なり。猶太國にては
 神の思想固より純粹ありしと雖も、神の人類の父たるを
 世に顯はせしはキリストなり。又神をして愛すべく敬
 すべきものとし、其性質を明かにせしも亦キリストなり。
 第二人間の位置たる、キリスト以前に在りては禽獸と伍
 を爲し、永遠の生命あるを知らず。又同じ人類にも貴賤
 尊卑の別甚しく、全く別人種の如くなり、自由の人と奴
 隸、男と女の懸隔の天壤も皆ならず。キリスト出て、始
 めて人間の位置を高尙にし、之に永生あるを教へ、又神

の前にてハ万民皆な同等なることを示せり。此外神人の
 關係、人間公共の道、夫婦の教、家族の制等キリストの
 教へ給ふたる所は、孰れも純然たる眞理に基かざるはな
 し。之を以て第十九世紀文明の光に照すも、更に不都合
 なきのみならず、今日の文明は即ち前上キリストの教示
 の開發にして、文明の進歩に依て其意義愈明かなるを得。
 殊に神及人類に關する所の教旨の如きハ、近世哲學の歸
 着する所と其揆を一にし、之か深遠なるに従て、愈之に
 合一せるを見る。ガリラヤの一匹夫何より斯の如きの思
 想を得しや、是亦奇と謂はざる可らず。
 第六。其教の絶倫あるのみならず、之を傳へ給ふの方法亦非
 凡異常なり。先づ第一ハ其教の平易にして何人にも解し易

き事なり。蘇東坡の荀卿論に孔子の言を稱讚するや曰く、
 循々然莫不有規矩、不_レ敢放言高論、_レ、_レ、茫乎不知
 其畔岸、而非_レ遠也、浩々乎不知_レ其津涯、而非_レ深也、其所_レ
 言者匹夫匹婦之所_二共知_一。キリストの言は更に之より平
 易なりとす。通俗の言を以て通俗の談を爲し、深遠ある
 眞理を啓示するに卑近ある比喩を以てす。天空の鳥、野
 の百合花、羊の群、芥子の種、光、鹽に至る迄、日常見る所
 聞く所の物一とし比喩とならざるはなし。教を布くことを
 種を蒔くに喩へ、吾人の天父に事るを番頭の主人に事ふ
 るに比ゆ。卑近の言平易の比喩を以て、高遠深遠なる眞
 理を世に明かす。是れ尋常學士の甚だ難ずる所あれど
 も、キリストに於て是れ亦平常容易の事のみ。更に苦心す

る所あるを見ず。是れキリストの福音の知者愚者學者不
 學者の別なく、普く万民の教とあるを得る所以なり。キ
 リスト夫れ何によりて斯の如き妙術を得しや、是亦甚だ
 異まざるを得ず。
 キリスト教授の方法に尙ほ一つの注意すべきとあり、即
 ち其教に權威あることなり。當時猶太人の其教を聞き一
 人とし其教の權威あるに驚かざるいなし。聖書に曰く「集
 りたる人々その教を駭きあへりそは學者の如くあらず。權
 威を有る者の如く教たまへば也」と。千八百年の後にある
 吾人其教訓を讀むに、其語に神の權威あるを覺ゆ。弟子
 を招き給ふには曰く「我に従へ我なんぢら人を漁る者と
 爲ん」。又山上の垂訓に斯の如き言多くあるを見る。曰く

古の人に云々と言へることあるは爾曹が聞きし所なり。
 然ど我れなんぢらに告げんと。又世の罪人を招き給ふに
 曰く「凡て勞たる者又重を負へる者我に來れ我なんぢら
 を息ません我は心柔和にして謙遜者なれば、我軛を負て
 我に學べ、なんぢら心に平和を獲べしと云々」誰か人に
 して斯の如き言を發し得るぞ。自負の最も甚しきものと
 雖も、斯る言を發するには必ず躊躇するならん。キリス
 トは柔和ある羔の如し、然るに如何にして斯る言を發し、
 如何にして斯る權威を以て人を教へることを爲す、必ず
 之が解釋なかるべからず。キリストを以て人間以上の力
 を有するものと爲すに非ずんば、到底之を解くことを得
 ざるなり。

第七。吾人がキリストに就き最も奇異の思を爲ものは、唯其敵の絶倫卓越なるのみに非ず、其事業の規模計畫の非常に宏大なるのみならず、又天下に比類なきことあり。アレキサンデルセイザルナポレオン秦の始皇及び我國の秀吉は、天下の所謂英傑なり。而して皆亦武威を以て天下を一統せんと企てたるも、其功半ばにして其身先死するか、或は幸にして其生を全ふするも、其屍未だ葬られざるに其偉業忽ち壊裂するありて、一も其功を收むる能はざりし。孔孟は王道を布かんとて空しく天下を流浪し、ソクラチース三十年間アテンスの市街を彷徨し、自己の哲學を以て市民を教化せんとしたるも、遂に其功を奏する能はざりし。然れどもイエスは身に寸鉄を携ふること

なく、孔孟ソクラチースの如き學説を唱へざるも、万世無窮なる王國、即ち天國なるものを確立するを得たり。且や天國の思想たる實に世人の思想の外に出、甚た驚くべきこと少からず。古來王國を建設せんと企てし英雄傑少からざれども、無形の王國を建設したるはイエスを以て始めとす。又完全なる政府を建て、人民の疾苦を救ひ、之に眞正の幸福を與へんとしたるもの少らざれども、一人も精神上の政府を設くるに考へ當りしものあらざるなり。キリストの天國は乃ち無形の王國、精神の政府にして、世の罪に沈淪し悪鬼の虜とされる不忠不幸の人民を救出して、其元に歸り神に就其政治を受しむる者あり。而して其國たる永遠無窮天地と共に永く存し、又宏

大無邊人類のある所絶島邊陲其教化を蒙らざるあきに至らん。イエスの斯る偉業を企つるに、世の智者學者と謀るとなく、又少しの威力を用ゑるをかく、始終愛を以て基と爲し、己の身を殺て其基礎を据たり。彼のナポレオンがセントヘレナの孤島にありて嘆息して、アレキサンデル、シイザル、シャールマン及び余は大なる帝國を建設せり、去ど我等の何によりて之を建設せしや、即ち武力を以てせり、キリストの獨り愛を以て其國を建つ、而して今日迄キリストの爲に生命を惜まざるもの幾千万人あるや知る可らずと曰ひたるも、キリストの此事業を指したるなり。キリスト夫れ何の處より斯の如き思想を得、何の處より斯の如き事業を爲すの精神を得じや。

第八。終りにキリストの行爲に就きて甚だ奇と謂ふ可き事の事を爲すの順序あり。キリスト道を傳ふるに學者貴人に傳へずして、先づ愚者貧賤の者に傳へたり。弟子を招くに社會に勢力を占むる有力の人士よりせずして、却て世に輕蔑せらるゝ漁夫税吏の中より撰べり。是れ吾人の甚だ怪む所あり。今夫れ世に事を爲さんとする者は、必ず先づ世の有力者に謀るを常とす。小人之徳草也、君子之徳風也、風加之草必偃、と上の好む所下之より甚きものあり。若し何事にても社會の上流に居るものに行はるゝを得ば、水の下に就くが如く、之が一般に及ぶことあるや疑ふ可らず。故に孔孟は天下を周遊し、常に其説の當時の君主に容れられんことを求めたるに非ずや。天

下に流行を圖るもの必ず先づ其都府に來りて其事を行ふ、是事を爲すの順序にして固より怪む可らざるなり。然るにイエスの行ふ所獨り之に反するは何ぞや。蓋しイエスは天下万世に教を垂んとする者なり、社會の組織を一變せんとする者あり、成效を永久に期する者なり。是れ其事を爲す順序の世人に異なる所にして、其下より事を始むるは第一、下等社會は其心謙遜にして教化し易きが爲めなり。第二、下等社會は社會の多數にして之が原質たり、此原質にして改るに非れば、社會の改良望む可らざるか故なり。第三、上より下に及ぶものは上下貴賤の別甚しき所に然る者なれば、社會を平等にせんとするには固より下より事を始めざる可らず。第四、下等社會は殊に

憐むべきものなればなり。第六、下より上に及ぶに非ざれば人の智慧才能のみ見て神の大能現れず、是れ信徒の爲め道德を損することなり。「キリスト下より事を始めしは、以上數ヶ條の理由によること明かなるが、何れの處より斯の如き智慧を得られしや、是れ天下の人の擧て奇とする所なり。之に就き一言附加すべきは、彼の事を爲すの穩當あることなり。随分世には下等社會に在り其爲を圖りて事を爲すものあれども、其結果たるやイツモ下をして上を怨ましめ、貧人をして富人を惡ましむるに至るを免れず。是れ世の民權家あるものが、當時の政府に容れられざる所以なり。然るもイエスの爲す所を見るに、更に斯の如き傾向あることなし。是れ實に奇と云はざる

可らず。前上に述べ來りたる所は、キリストの性質の重要なものに過ぎずと雖も、之にて幾分かキリスト其人の類と伍す可らざる事を知るに足らん。而して此等は四福音中の著しき事實なり。聖書中詳細の點に至ては疑ふべきものなしと云ふ可らざれども、正直に聖書を讀むもの誰か其大要を疑はんや。此等心靈上の事實は、細かに之を究むるときは、其奇跡より遙かに不思議ある事と爲さざる可らず。而して此不思議ある事は人にして之を爲すを得るや。キリストをして眞に神性を有する神の子と爲すに非れば、其不思議は到底解説すべからず。嗚呼キリストは實に神子なり。

仰之彌高鑽之彌堅、吾人キリストを深く究むれば、益其神子たると顯はるゝ也。



第七章 奇跡と其効用

諺に之あり義にこりて噂を吹くと、世人基督教の奇跡に於ける亦之に異ならず。吾人元と迷信誤謬の間に成長せしものあり。古傳鬼神説の多く信するに足らざる、已に吾人の知る所なり。浮屠氏の虚誕、神道の荒唐は申すに及ばず、古より正史實傳として傳はる歴史上の事實さへ、文明の學術に照し見れば、多く信を置き難きものたる。

亦已に吾人の知る所なり。吾人已に從來の怪談奇説の荒唐虚妄なるに懲りたり。亦何の必要ありてか、再び基督教の奇跡休徴など、稱する怪説に惑はさるゝことをせん。是れ蓋し始めて基督教を聞く中人以上人士の、其奇跡休徴に對する感格ならん。當今基督教の道德を慕ふものにて、漫に奇跡休徴を其教より分離し、唯道德上の教のみを採らんとするもの少からず。即彼の「ユニテリアン」派を我國に輸入せんとするもの、如きはなり。未だ深く基督教の教理を學ばず、唯皮相の見解をなすものにして、斯の如きことあり、固より怪むに足らざるなり。夫れ奇跡が信仰の礎石とある、實に始に教を學ぶもの、みに非るなり。己に之に信するものにて、之を解説す

るを難んずるの甚き、強いて之を輕んじ其難問を避けんとするもの少からず。是れ蓋し歐米近時の神學者にして、此問題を重せざるか如き傾向ある所以なる乎。奇跡休徴果して其教より分離し得べき乎。基督教を以て單に道德教、若くは專はら一種の哲學を教るものとなさん乎、其歴史上の事實如何、勿論之か人より出る乎、將た神より来る乎、奇跡の眞偽如何、固より其教の價値に格別の影響を及すことかかるべし。然りと雖も基督教の主眼にして、果してキリストの唱ふる如く、使徒等の傳ふる如く、贖即ち救にありとせば、之か眞偽の關係決して僅少に非るなり。奇跡休徴にして信す可らざるものならん乎、基督教の天啓に出る亦信す可らず。基督教の

天啓に出る信す可らずとせん乎、吾人の信仰や徒然、我
 儕尙ほ罪に居らん。(哥十五〇十七)夫れ眞理は猶ほ錠鎖
 の如く、一の缺所あらば連続するを得ざるなり。キリス
 トを神子とする、天啓ありとする、孰れも奇跡と連続す
 るの眞理あり。奇跡にして信す可らざるものならん乎、
 神子天啓の眞理亦立つを得ざるなり。上帝の存在を始と
 し、基督教全軀の教旨には、奇跡の思想含まれざるはな
 し。若し之より奇跡の思想を削除せん乎、恰も輕氣球よ
 り輕氣を抜きたるか如く、直に屈縮墜落せざるを得ず。
 奇跡は則ち基督教の生命あり、争て之を輕ずるを得ん。
 加之キリストの教へ給ふ所を見るに、奇跡休徴を過度に
 貴重せるは、万々其の喜び給はざる所なれ共、(太十二〇

三十八より四十、同十六〇二、より四〇之を以て自己の
 神子、救主たるの證例と爲し給ふたるは、疑ふ可らざる
 事なり。イエスキヤ人にて告げて曰く、「我はヨハナより
 大なる證あり。蓋父の我に賜ひて成し遂けしむる事、す
 なはち我が行ふ所の事、是父か我を遣ししことを證す
 ればなり」(約五の三六)又曰く、「我は父にをり、父我に
 在ると、我がつげし言を信せよ。若し信せずは、我が事
 に因て之を信すべし」(約十四の十一)又彼のニコデモか
 イエスを以て神より來りし師ありと信せしは、イエスの
 行ひし休徴を見ればなり。(約三の二)又使徒パウロは
 「聖善の靈性に由れば、疑りし事によりて、明かに神の子
 たること顯れたりと云ひ」(羅一の四)イエスの奇跡の最

も大なる復活を以て、其神性を證したり。聖書の云ふ所にして、信す可きものとせば、キリスト及び弟子等が奇跡休徴を以て、其教の神より出てし一の證據とせしや疑ふ可らず。

上來論する如く、奇跡休徴の基督教より分離す可らざるは、明白の事なるが、蓋し之か證據を爲すの力に於ては、時代により、人心の傾向により、強弱なき能はず。

「ユダヤ人は休徴を乞ひ、ギリシヤ人は智慧を求む」人の心の向ふ所、古今國々によりて、大差あるを免れず。抑奇跡休徴の當時にありて、大なる勢力ありたる、疑ふ可らず。殊にユダヤ人の如く、常に休徴のみを求むる國民間に在りては、當る可らざるの證據力を有したる、亦怪

むに足らず。是れ蓋し基督教が初代に在て、種々の障礙あるにも關はらず、案外速かなる進歩を致せし所以からん。然れどもギリシヤ人の如く、専はら知識を尊ぶ所には、奇跡の最初信仰の礎とあり。殊に今日の如く科學の威權、猖獗を逞ふする時代には、奇跡の直に教の證據となるを得ざるのみか、却て障礙を爲すの傾きあり。我國今日の場合、即ち専ら知識を尊ぶの勢にて、其趣きギリシヤ人の知識を慕ふに似たり。斯の如き場合にては、奇跡休徴を證據に用ゐんには、先づ其必要其確實なるを論證せざる可らず。是奇跡休徴の効用を顛倒するものに稍困難を覺ゆる所なり。

且つ奇跡休徴の證據力たる、其時の距離如何により著し

き強弱あるは、理の最も觀易き所あり。吾人にして聖書
 時代に居るか、若くは其奇跡休徴にして、今日吾人の眼
 前にて行はるゝとありとせん乎、奇跡休徴の力は、實に
 無上にして公平の心を有する者にあらんには、必らず之
 にて基督教の神出、キリストの神子たるを信せざるを得
 ざるべし。諺に云ふ、論より證據と。一の正確ある證據
 は、百の巧なる議論に愈る。五つのパン、二つの魚を以
 て、五千人を飽かしめ給ふたる如き、又は難治の惡病一
 言以て忽に醫し給ふたるが如き、到底人力の企て及ぶ所
 にあらず。若し強いて惡鬼の所爲乎、或は衆人皆な永久
 に惑ふたるならんと疑は、イザ知らず、普通の攻察力
 を有するものにてあらんには、争て神力の直接に現はる

べものたるを疑ふを得ん。然れども今や奇跡の時代は已
 に過ぎ去りたり。吾人は千八百有餘年の後に在るものな
 り。我か目之を見、我が耳之を聞くを得ず。我之あるを
 知るは、唯千八百有餘年の歴史と、口傳によるのみ。さ
 れば奇跡を以て基督教の證據に用ゐんとするには、先づ
 奇跡を歴史上、確實にせざる可らず。千八百有餘年前の
 事を確認する、容易の事に非ず。假令ひ之を確認し得る
 も、尙ほ之に附加する種々の疑團を解かざるを得ず。語
 を替へて云へば、聖書の奇跡は聖書歴史上の證據、天啓
 の必要、及びイエスの神性等と共に確認せらるゝを得る
 ものあり。されば奇跡の證據は、今日に於てはキリスト
 時代か、若くは之に接近せる時代ほどに、勢力あるもの

にあらざるを知るべし。古來基督教を論證するもの、多くは奇跡論を以て第一と爲す。彼のペリーの證據論の如き是あり。又た近時のモヅリ、氏の加き、亦専ら之を用ゐたり。然れども近來神學世界の思想一變し、證據論の論法は、古今大に其趣きを異にするに至れり。ペリー派の論法を汲むものは、歴史上の論證を先きにしたれども、今時の神學者は、基督教の合理的あるを證論するを先きとす。古は外部の證據を重んじたるが、今は内部の證論を重す。古は奇跡論、豫言論等を先きにしたるも、今は有神論、キリスト論、基督教合理論等を始とす。是れ時代及び人心の傾向により、證據の種類を異にする所以にして、別に怪むに足ら

さるなり。然らば則ち今日に於て奇跡論の効用何くにかある。余が見解よして、果して太過かかりせば、余は奇跡論の効用は、先づ之れを以て基督教の天啓を論證するにあらずして、基督の神性及ひキリスト教の神出の論證を固むるに在りど、云はんと欲するなり。何をか其論證を固むると云ふ。奇跡は即ち基督教自然の結果あり。有神論を始めとし、天啓論、キリスト論、豫言論等、皆な奇跡の思想、之に附加せざるはあし。有神論、天啓論、キリスト論等の論證も、奇跡あるものありて、始めて確立するなり。奇跡は則ち基督教の記章なり。之ありて其神出たると確定す。されば奇跡論の用は、始めにあらざして後にあり。

前に之を證論するにあらざして、後に之を固むるに在り。以上奇跡論の徵證力を論述したるが、之より進て奇跡の性質如何んを論せんと欲す。古來奇跡の成否を疑ふもの少からず。夫れ之を疑ふは、其性質如何を明かにせざるにより、奇跡を論するもの、多く之を以て自然法を破るものと爲す。是れ奇跡の成る、甚た信し難き所以なり。奇跡は自然法を破るに非ず、唯上帝自然以上の動作のみ。元來奇跡の甚た信し難きことあるは、神及び万有の思想に誤り多きに由る。從來神の思想たる、神は万有の外に在りて、外より此世界を創造統御する、恰も大工か家を造り、又は機關士か機關の外に在て、之を統御するか如きものと爲す。是れ奇跡の思想にて、甚た窮屈なる所以

なり。夫れ機械は精密なる、機械的なる、一定の理法に従て、運動するものなり。若し機械にして、少しの損所あらん乎、忽ち全軀破壊せざるを得ず。機械の動作、毫末の自由あらざるなり。世人多くは神を以て機關士の如く、此宇宙を以て機械の如く思惟す。是れ此宇宙に奇跡の餘地なき所以なり。且つ學者の自然法と云ふものを見るに、甚た誤りたる思想あるを知る。普通學者の思想にては、此宇宙萬有は一定の理法にて統御せらるゝ、猶ほ政府か一定の法律を以て、人民を治むるが如き者と爲す。是れ即ち奇跡か自然法を破るなどの思想起る所以あり。何をか自然法或は理法と云ふ。是れ唯宇宙万有普通の運動を指すに外ならず。夫れ宇宙万有は思想自由感覺ある

有心者の動作なり。自然法或は理法は、其普通なる動作を云ふ。而して此理法たる必然のものに非ず、自由の心意より起るものなり。されば神にて特別の動作を爲すの必要あらば、奇跡あるもの起り得るや、固より當然なり。神の存在を適當に見認むるものには、奇跡を信ずる、決して困難にあらざるなり。

加之假に自然法を以て、動す可らざるものと爲すも、奇跡の思想必ずしも之と矛盾するに非ず。何となれば一自然法の上に、他の一層高等なる自然法を加へば、其法に勝つとを得ればあり。譬へば重力の理法は、最も弘く行はるゝものあれども、之に一層高等なる理法、即ち固結力を加ふれば、重力を制して分子固結し、一團の土塊

となるを得。粘着力の理法普く分子間に行はるゝと雖も、之に一層力ある化學的の親和力を加ふれば、之に打勝ちて一の分子分れて他の分子と親和し、更に一種の物軀を生ずるに至る。化學的の親和力強しと雖も、若し之に一等上なる力、生命力を加ふときは、則其親和力を制御して、自家必要の分子を探り、之を以て己か軀を養ふことを爲す。又生命の力甚た強しと雖も、智力の自在なる動作あるに如かざるなり。智力は即ち方法の上に在りて、凡ての力を使役するものあり。爰に一個の人あり、瀛車を作りて地上を運轉すと假定せよ。其軌道に用る鐵材は、如何にして之を得るや。先づ鐵礦に入り重力と固結力とを制して、礦物を掘出し、又之を火爐に入れ、化學的の

親和力を御して、他の物質より之を分拆す。其客車に用る木材を得るも、之に異ならず。重力を制し、固結力を御し、親和力及び生命の力に打勝て、始て其目的を達するを得。鐵路瀛車を造る、智力の動作にて、終始他の自然力を馭御し、之を適用して、其目的を遂くるなり。又瀛車を運轉するや、自然の力を以て自然の力に勝ち、智力を以て其自然力を適當に配置し、以て其運動を爲すを得。斯の如く考察し來れば、人類の動作を始とし、自然力の動作は多く他の自然法を制する働と爲さるを得す。自然法を制する動作是れ奇跡あり。されば人間の動作、多くは奇跡の性質を有するものと謂ふべし。人にして已に多くの驚く可き動作を現すものとせば、遙か人類より

高等の力を有する神にして、人間以上の奇跡を現すは、怪むに足らざるなり。奇跡即ち人間以上なる神の動作あり。神にして奇跡ある、固より其分なり。亦何ぞ奇とするに足らん。

爰に至ては吾人は奇跡の基督教固有の附屬物にして、其當然なるを明に知らん。人類にして罪に陥ることあり。是れ救道の起る所以あり。神已に其神子を降して、人類を罪より救ふことを爲す。是れ已に自然普通の動作にあらず。キリスト已に神力を以て世に出つ。之に人間以上の動作ある、固より當然なり。智者には智者の事業あり。愚者には、愚者の事業あり。神力を有するキリストにして、奇跡ある固より其分なり。何ぞ怪むに足らん。

信 仰 之 理 由 終

同 明 治 二 十 二 年 三 月 十 三 日 印 刷
三 月 十 九 日 出 版

定 價 貳 拾 錢

著 者 兼 發 行 者 兼
小 崎 弘 道

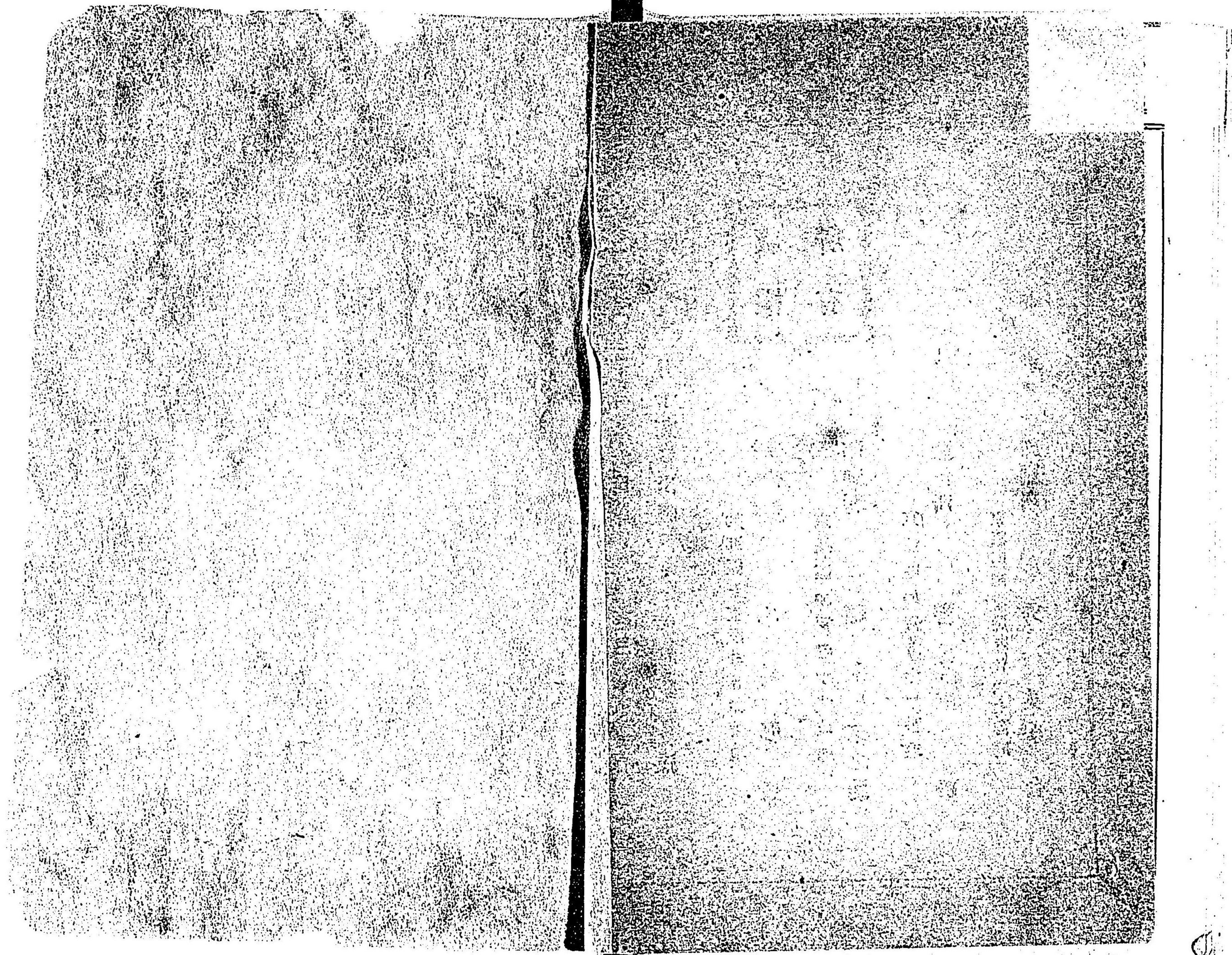
印 刷 者
京 橋 區 加 賀 町 十 一 番 地
福 永 文 之 助

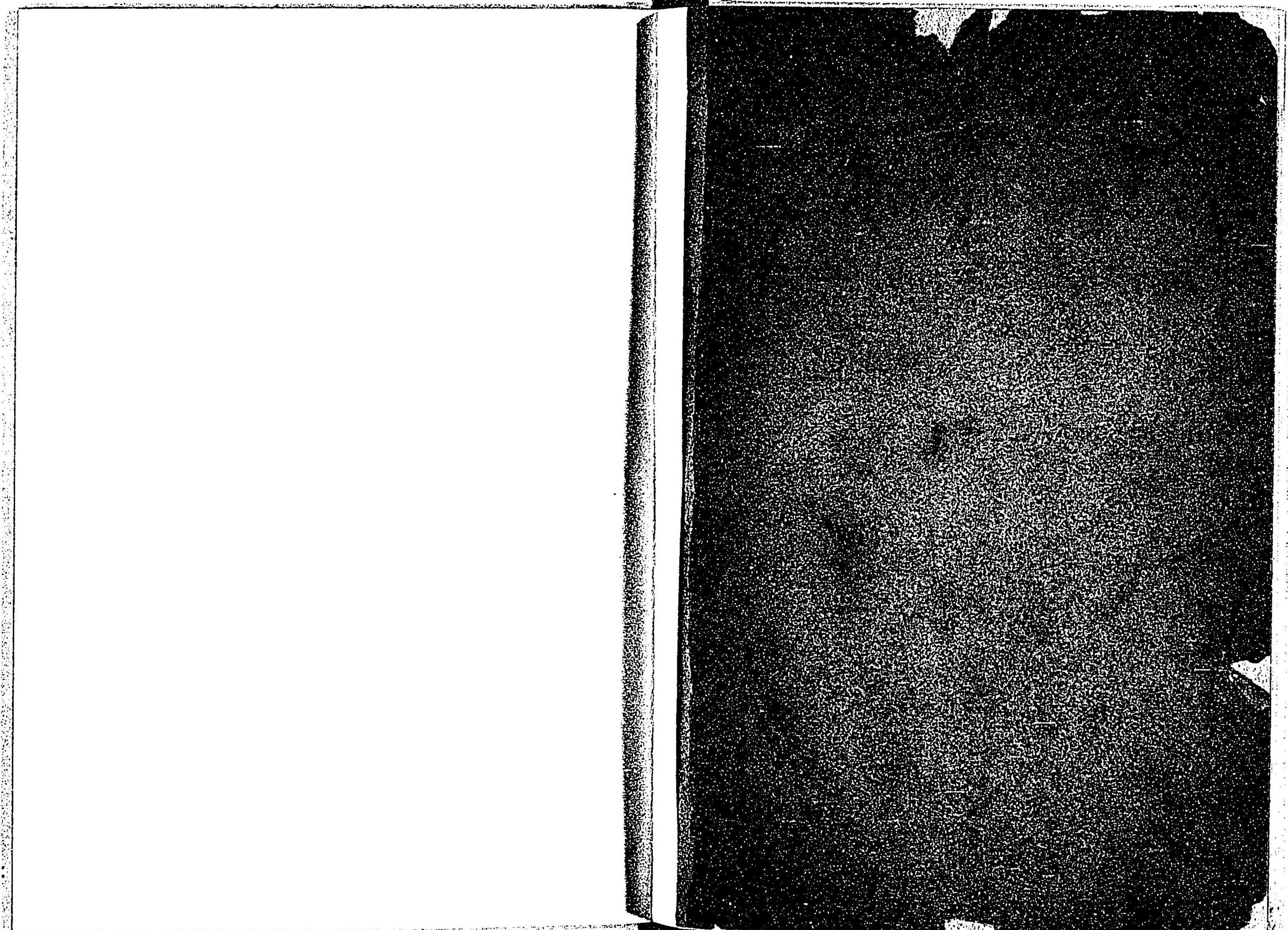
發 行 所
京 橋 區 加 賀 町 十 一 番 地
警 醒 社

印 刷 所
京 橋 區 西 紺 屋 町 廿 六 七 番 地
秀 英 舍

版 權 登 錄

所 有 版 權





特61

865

信仰之理由

国立国会図書館

020800-000-0

特61-865

信仰之理由

小崎 弘道/著

M2'2

ABI-0626

